

## 2017 年度春季人権週間プログラム講演会

日時：2017年7月7日（金） 18：30～20：30

会場：立教大学 池袋キャンパス 8号館 8201教室

# 『SNS 拡散力の光と影 ーネットワーク社会における世論、 書き込み、炎上ー』

講師 木村 忠正 氏（本学社会学部教授）

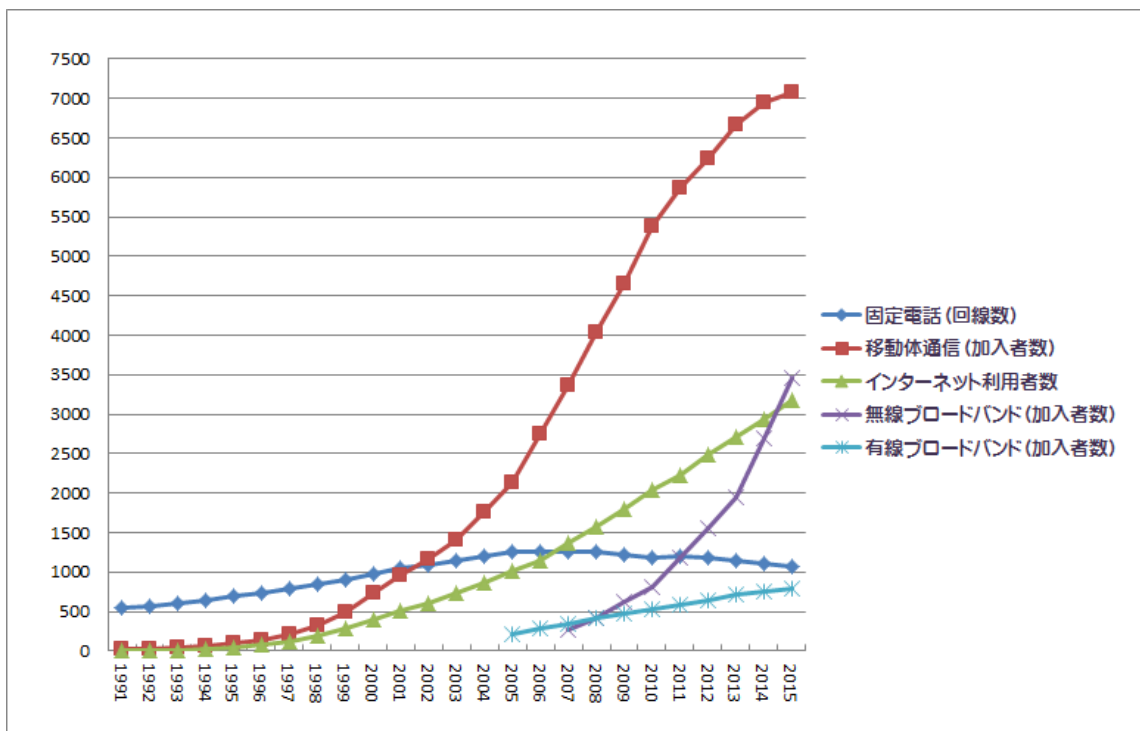
内田 芳宏 氏（立教池袋中高教務部長、本学学校・社会教育講座講師）

## 【日本独自の発展を遂げたデジタルネットワークの波】

○木村 皆さん、こんばんは。社会学部の木村です。私は文化人類学で専門教育を受けましたが、アフリカやアマゾンフィールドにするのではなく、サイバースペースという人類にとって新しい活動空間をフィールドワークとして研究を進めてきております。

今日は主として大学生の方が中心と思っていましたら、ベテランの方もいらっしゃるようですが、私の研究にもとづいて、若年層を中心としたソーシャルメディア、SNS 利用、さらに、「ネット世論」についてお話していきたいと思います。

インターネットの場合には、どうしても拡散しやすい、炎上が起こりやすいというところがあります。そこで「ネット世論」というと、一部の人が過激で、偏った言説を大量に流布する印象をもたれる場合があります、フェイクニュースとかポストトゥルースと強く結びついて捉えられることもあるのですが、そうしたことについて少し私の研究をお話しさせていただいて、少しでも皆さんのお役に立てればと思っております。



まず、こちらのグラフをみてください。これは 1991 年から 2015 年まで、世界全体でどのくらいの通信が普及してきたかを示していて、この赤いのがいわゆる携帯電話、スマホです。90 年代前半、95 年ぐらいまではほとんど普及がなかったものが、ここ 20 年ぐらいの間で携帯電話にしろ、それからこのグリーンがインターネットなのですが、インターネ

ットにしる、普及をしてきました。今日この講演会の参加者の皆さんの中で、95 年以前生まれの方はどのくらいいらっしゃいますか。半分くらいいらっしゃいますね。今の大学生の皆さんは、そういう意味では生まれたときからこの過程とともに育ってきたことになります。それ以前の私たちは、私も含めてですが、アナログ大陸でずっと育ってきて、デジタル大陸に移民してくるような構造になってきております。

デジタルネットワーク自体は、やはりどうしても技術的な変化が速いので、だいたい5 年ぐらいで大きな波が変わってきた経緯があると考えています。日本では 90 年代の後半にようやくインターネットが多少普及するとともに、95 年の阪神淡路大震災の時に、携帯電話がつながるということがありました。でも、みんなが携帯電話を使うようになってから今度はつながらなくなってきた、2011 年の 3.11 のときには、今度は Twitter が活躍するという話になるわけですが、このように携帯電話がある程度普及し始めて、パソコンやインターネットが社会に普及し始めたのが 90 年代後半です。2000 年代になると、2000 年ぐらいからいわゆる日本の i-mode といわれるものが普及することになったのですが、これは世界的に見て異例な形です。携帯電話でインターネットが接続できるというサービスは日本独自、というか日本と韓国でかなり広範に普及したのですが、世界的に見るとほとんど普及しませんでした。それは、やはり価格が高いとか、日本だと狭い国土だからこそできたというところがあります。

第三の波がブロードバンドの波で、ADSL というような速い回線とか光配線がある程度普及し始めて、このころから SNS、ソーシャルメディア、動画サイトといわれるようなものが普及してきます。2008 年の iPhone からスマホの時代というのが始まります。そういう意味では、スマホも始まってから 10 年ということで、そろそろ賞味期限が切れてきていることも間違いなくて、次の波が一体何かということを恐らく業界の人たちは常に考えているのではないかと思います。

### 【急速に普及したソーシャルメディアーデジタル情報の特徴とはー】

今日の話の中でやはり中心になるのが、ソーシャルメディアといわれるもので、「Web2.0」とも呼ばれます。これは、今の話で言ったように第三の波から始まったもので、ブログとか SNS、Wikipedia や YouTube、ニコ動（ニコニコ動画）とかが出てきます。

 <b>Google</b>	<b>1998年9月</b>
 <b>2ちゃんねる</b>	<b>1999年5月</b>
 <b>ウィキペディア</b>	<b>2001年1月</b>
 <b>グリー</b>	<b>2004年2月</b>
 <b>ミクシー</b>	<b>2004年3月</b>
 <b>Gmail</b>	<b>2004年4月</b>
 <b>アメーバブログ</b>	<b>2004年9月</b>
 <b>Youtube</b>	<b>2005年12月</b>
 <b>モバゲー</b>	<b>2006年2月</b>
 <b>ツイッター</b>	<b>2006年7月</b>
 <b>フェイスブック</b> 一般公開	<b>2006年9月(限定公開2004年)</b>
 <b>ニコニコ動画</b>	<b>2007年1月</b>
 <b>iPhone</b>	<b>2007年1月</b>
 <b>アンドロイド</b>	<b>2008年10月</b>
 <b>iPad</b>	<b>2010年4月</b>
 <b>LINE</b>	<b>2011年6月</b>

このスライドをみてください（はじめは、サービス開始年月が提示されていない）。皆さん、ちなみにこれらのサービスがいつぐらいに開始になったかというのはわかりますか。世界に冠たる、Google、Wikipedia、皆さんの日々の生活になくてはならないものも随分あると思うのですが、どうですか、何となくすぐ思い浮かびますか、何年ぐらいに始まっているか。どうでしょう。（ここでサービス開始年月を提示。）Googleですら20年たっていないのですね。Gmailも、立教にとってはGoogleのGoogle Appsを使わせてもらっているのととても便利ですが、まだ15年たっていないというところです。Twitterやフェイスブックはようやく10年、ニコ動もまだ10年しかたっていないということですから、いかにこの短期間に私たちが必要不可欠になっているインターネットのテクノロジーというのが普及したかということがお分かりいただけると思います。Androidも2008年ですので、まだ丸9年たっていないという状況になります。LINEも2011年ですからね。2011年6月なので、ちょうど6年。私は、実はいまだにLINEのアカウントを取っていません。何となくどこか心の中に障壁があってアカウントを取っていないのですが、6年しかたっていないけれども皆さんにとってはおそらく不可欠なものだと思います。

これらは結局、皆さんにとっては当たり前ののですが、利用者が自分でデジタル情報を発信できるということです。コンテンツが集積することで、単にそれまで電話であれば電話でお互いにコミュニケーションする、ファックスならファックスでコミュニケーションするというように、個人間のコミュニケーションはあくまで個人間だけだったわけですが、個人間でコミュニケーションしているものがソーシャルメディア上で流通することで社会的現実をつくりだしています。皆さんにとってはテレビが報じるから社会的現実ということではない。あるいは新聞はもう読まないかもしれないので、新聞の報道も現実を構成し

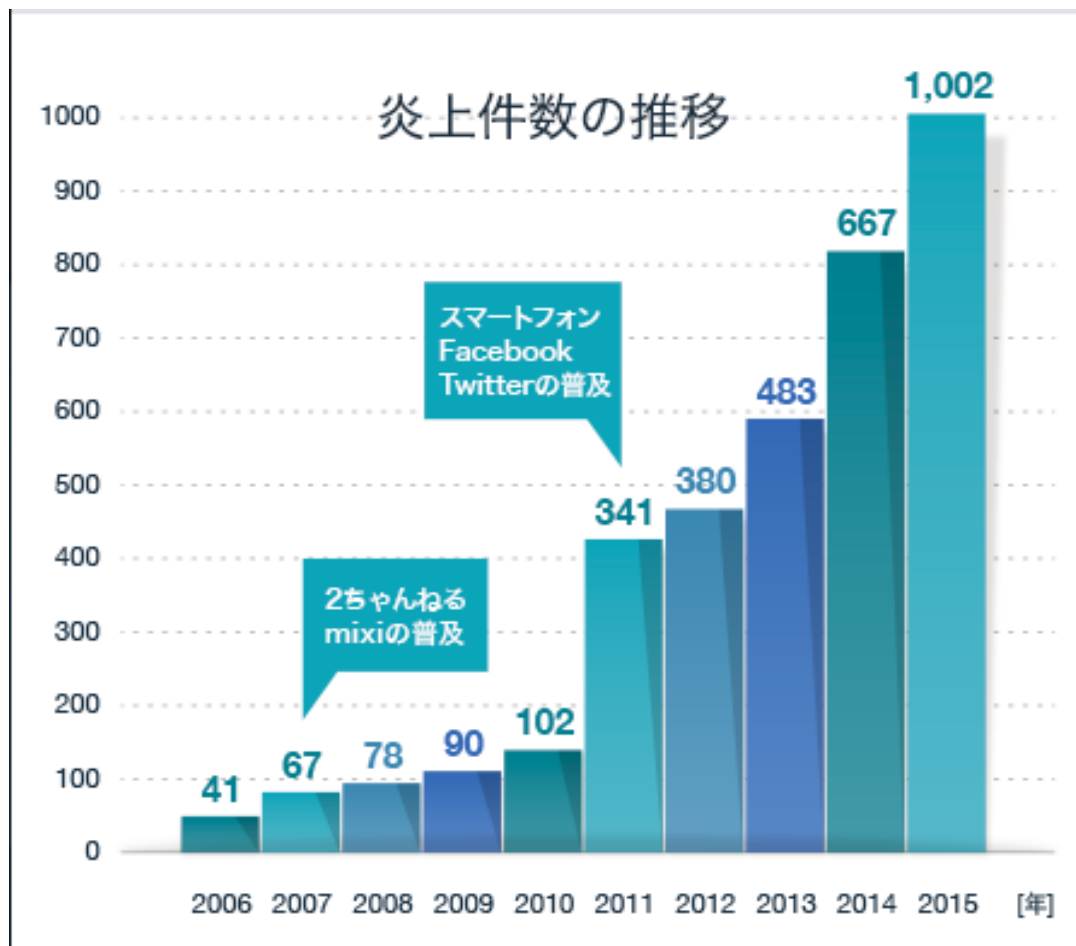
ない。そうすると Twitter で流れてくる、LINE で流れてくるものが皆さんにとっての現実だということになってきている状況だと思います。

それに伴って、デジタルの場合には、やはり大きな特徴としてクローン化という現象があります。つまり、アナログ時代は、マスターというかオリジナルがあつてコピーがあつてというオリジナルとコピー関係なので、必ず劣化するし複製コストというのがありますから大量に複製して社会にばらまく力というのはごく一部のしか持っていないわけです。例えば新聞は、新聞社があつて、大きな輪転機を持っていて、なおかつ全国に販売店網を持って、新聞少年が自転車、バイクで配達できるというものすごいインフラを持っていないと何百万という人たちに同じ情報を届けるということは不可能だったわけです。だからそのあたり、デジタルが当たり前の人たちには、やはり想像力を豊かにしてほしいと思います。アナログ時代とデジタルというのはおそらく根本的に変わってきていて、私の印象では産業革命と同じくらいのインパクトがあるというふうに感じているので、これからおそらく 10 年、20 年、30 年の間に社会の構造自体がすごく根本から変化することになるのではないかと思います。

その点、デジタルは、それこそ皆さんがちょっとつぶやいたりちやつたものが何千回、何万回、何十万回という形で炎上してしまう。だからデジタル情報というのは、オリジナルとコピーではないわけですね。それはクローンなわけで、全く同じものでコピーされたらどちらがオリジナルかと問うこと自体無意味な存在になっているわけですから、それがネットワーク上で徘徊することになります。

### 【ネット上を徘徊する炎上のネタ ―異質なデジタルの世界の時間軸―】

エルテス社 (<https://eltes.co.jp>) というネットセキュリティ会社が、Twitter で 50 回以上リツイートされて特定のまとめサイトにまとめられたものから炎上と認定したもののというグラフがあつて、年々、炎上件数は増えています。2015 年には 1,000 件を超えています。2015 年は「異物混入」とか「安保法案」とか「オリンピック」、「オリンピック」というのは例のロゴマークの問題ですね。佐野さんの問題がありました。あとは「情報漏えい」とか「バイトテロ」とか、これは皆さんも十分わかっていると思いますが、例えば、YouTube で「マクドナルド」「鶏肉」というふうに検索ワードを入れると、いまだに「期限切れの肉を混入か」みたいな形が出てきてしまいます。



2015 年炎上現象

- 1 位：異物混入
- 2 位：安保法案関連
- 3 位：オリンピック関連
- 4 位：情報漏洩
- 5 位：バイトテロ

(エルテス社ホームページによる)

ですから、1 回不祥事が起きると、ちょっと何かあれば振り返ってすぐに検索できてしまうので、デジタルの世界というのはある意味で時間軸というのは全く異なるわけです。昔のものが色あせて朽ちていくわけではなくて、デジタル上では時間というもののタイムスタンプそのものは意味がない状況になりますから、こういうことで1 回載ってしまうと何度も何度も出てくることになって、「マクドナルドはこうなんだ」というふうに思ってしまう。これでまたマクドナルドを食べる気をなくす人が出てきているかもしれませんけれども。それから、「バカッター／バイトテロをまとめた画像集」というものもあるわけですが、ですから皆さん、こういうものも1 回やってしまうと、何度も何度もこうやって繰り返しネタにされてネット上を徘徊することになります。見てみると色々な画像が出てきますが、こういうことをやってしまう人がいて、それがネット上を徘徊しています。このあたりはのちほど内田先生からいろいろ実例についてのお話があると思いますが、子ど



もにタバコを吸わせてしまったりとか、つい友だちと遊びのつもりでやったことがネットの場合にはパブリックな空間に解き放たれてしまうというところがやはり怖いところです、そこを踏まえて私たちは行動しなければいけないというわけです。

いまお目にかけているのは、知っている人は知っていると思うのですが、サイバー攻撃の様子をリアルタイムで検出してビジュアル化してくれるサイト (<http://map.norsecorp.com/>) で、私のイメージだと、ある意味ではネット炎上というのはこんな感じです。もう世界各地、至るところで今この瞬間も何かちょっとしたことがネタになって、すぐ数十、数百ぐらいのリツイートを巻き起こす。これはサイバーテロのほうなのでちょっと違う話ではあるわけですが、逆に言うと、サイバーテロみたいなものも日常茶飯事的に行われているのがサイバー空間であるというふうに考えることができます。

### 【具体的な炎上研究から見てきたもの】

ネット炎上研究とか過激な言論に関する研究というのは、2010 年代、実証的に進んでおります。去年刊行された『ネット炎上の研究』というものがありまして、これは2万人ぐらいのネットユーザーを対象にして行った調査で、「炎上で書き込んだことがある」というのが200人に1人、「二度以上書き込んだことがある」が100人に1人ぐらいという結果が出ています。こういうネット調査で回答する人というのはインターネットをよく使う人たちだろうということで補正した結果が、1.11%という数値になりました。「過去1年間に炎上に参加したことがある」のは、この炎上参加者、1%ちょっとのうちの42%に当たります。彼らは「現役の炎上参加者」という言い方をしているのですが、1年間に一度でも炎上に参加する人が200人に1人。ネット人口で推定すると20万人ぐらいが、何かあったら



ちょっと炎上させてやろう、みたいな感じで面白半分でやったり、ネット炎上の研究で私の研究にもかかわるのですが、実は正義感が強い人が結構やっています。やはりやるからにはそれだけのモチベーションがないといけないわけで、面白半分という方もいますが、反面、その人なりの社会正義に駆られてしつこくやる方もいます。例えば、たまたま今日、西田敏行さんの中傷する虚偽の情報をブログに掲載した疑いで3人逮捕者が出ました。薬物をやっているんじゃないかということをネットでしつこく言う人がいて、あれは面白半分という人もいるかもしれませんが、おそらく何かそういうことに憤っている人で、「西田さんはあんな人のよきような役をやっていて、実はひどいことをしているんじゃないの?」と思って書き込んでしまうという方もいるのです。

### 【炎上に加担するごく一部の人たち ー明らかになってきた彼らの属性ー】

彼らの研究では、1回当たりの参加者はだいたい 2,000 人ぐらいなので、結局ネット人口に当てはめると、10 万人に何人かぐらいしか1件当たりの炎上に参加していないということになります。マクドナルドであいうチキンの騒ぎがあったらもちろん大変なんだけれども、実はごく一部の人が何度も繰り返しているということなのです。しかも9割以上は一言感想を述べる程度なので、粘着質な方々というのは1件当たり数十人、いってもせいぜい 100 人のオーダーで、直接攻撃するとなると本当に数人なんだということを明らかにしています。

なおかつ彼らの研究では、やはり若ければ若いほど加担しやすいということがありますが、それまでどちらかというと不安定な職種で、学歴が低くて年収も低い人たちがやっているのではないかと思われていましたが、実は子どもを持っていたり、世帯年収もちょっと多いほうが炎上に参加しやすいということも明らかになってきています。



その辺りに加えて、さらに「ネット上で嫌な思いをしたことがある」とか、「ネット上では非難してもよい」というようなこと、つまり、ネットで嫌な思いをしたらやめればいいのに、「嫌な思いをしたからやる」という方が結構いるということも明らかになっております。企業などを対象にして考えたときには、実はその数人から十数人がしつこくやるだけだからそれほど気にする必要はないというのが田中さんと山口さんのメッセージです。

ただ、やはり個人として考えたときには、たとえ1人の人からでもしつこく非難されてしまったらきっと皆さんすごいダメージがあると思います。自分が炎上の対象になったりそのネタが拡散してしまうと、あたかも自分がもう世界の中で孤立してしまっているいろいろな人から叩かれているというように思い込んでしまうかもしれません。ですが、こうした調査を踏まえると、そんなことはないのです。もうごく一部の人がちょっと嫌がらせ目的だったり、ちょっと変な正義感でやってくるだけなのです。でも、そうは言っても、やはり個人でその攻撃に耐えるということとはとても大変なので、今日の特に後半の内田先生のお話なども踏まえて、過度なことは慎むようというようなことはもちろん個人としてすべきであると思います。

あと、2015 年に出ている研究では、『レイシズムを解剖する』という高史明さんの本がありまして、これはいわゆるヘイトスピーチに関連して、コリアン関係のツイートを Twitter 上で収集して分析したものです。彼の研究では、10 万以上のツイートを集めて分析していますが、その大半は、コリアンについて何か嫌なことを言っているわけです。ところで、10 万ツイートの投稿者 ID は 4 万 3,000 もあり、そのうちの 8 割近くは 1 ツイートしかつぶやいておらず、たった 1 %、471 の ID が 100 以上ツイートしています。つまり、やはり一部の過度な人たちが、そのコリアンの人に対して非常に厳しいというかヘイトスピーチに当たるようなことを次から次へと投げかけて繰り返し投稿しているということな



ので、ここも炎上研究と全く同じ構図で、どうしても一部の人が過度に活動することであたかもそこが大きいように見えてしまうということは確かです。だから、もし皆さんが炎上に巻き込まれても、そこはやはり忘れないようにしてほしいと思います。さきほども言いましたが、世界全体が敵になっているとか、そんなことは絶対ありません。本当にごく一部の人が面白がってやっているだけなのですから、皆さんが信頼できる人のサポートを得て、嵐が過ぎるのを待つということもやはり必要だと思います。

## 【研究結果から見てきたネット世論とは

### ー〈言説、感情、行動〉の複合体として捉えるべきものー】

ここからは私が研究しているネット世論についてお話したいと思います。Twitter だけだとどうしても若い人に偏ってしまうとか、Twitter の大半が実は日常的なことで、「今日お昼ご飯〇〇食べたよ」みたいな話で終わってしまうわけですが、政治的、社会的な出来事やニュースに対して人々がどんなことを感じ取っているのかということで、Yahoo! ニュースさんにご協力をいただいて、2015 年から研究を進めております。その成果が出つつあるので、そこも少しご紹介したいと思います。

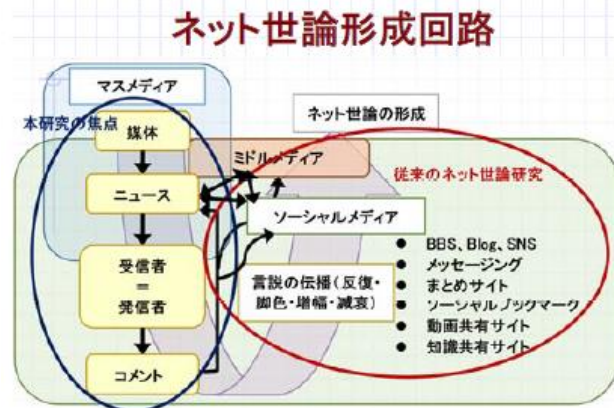
ネット世論について、これまで炎上やヘイトスピーチの構造を見てきましたが、「ヤフコメ」でも似たようなところがあります。どうしても一部の人が繰り返し繰り返し、それこそコピペしたり同じような表現を繰り返して批判をする、非難をするということで生み出されて、その部分がどうしてもコメントの中で多くなってしまうから、実は人数としてはそれほど多くなくてもあたかもそれが社会一般の見解のように感じてしまうというところがあります。

でもそうすると、ネット世論というのは、結局は社会一般の世論とはかけ離れたものという結論になってくるわけですが、私自身、研究を進めていくと、どうも単純にそういうことではないなというふうに考えるに至っています。あとでデータをご紹介しますが、やはり「ヤフコメ」の場合にも、週に1、2回、ちょっと自分の感じたことを普通に表明する人たちがむしろ8割から9割以上、95%ぐらいを占めて、その人たちのコメントというのがだいたい総量としても7割以上は占めるわけです。そうした1つ1つのコメントの集積、感情をもってリツイートとか「いいね」とかをする言説、感情、行動の複合体としてネット世論を捉えるべきではないかと考えています。ネット世論というのが一部の過激なことを言っている人たちの世論だと、特にマスメディアはそういう捉え方をしてしまうように思います。ですが、トランプ現象とか、あるいはフランスの極右勢力の問題とか、一方で日本でもリベラルの衰退という問題があって、保守的な言説が特にネットでは強いのかのように思えるという現象が出てきているのですが、必ずしもネット世論が偏っているというふうな単純な問題ではないのだというのが私の研究で明らかになってきているところで、そのお話を少しします。

## 【日本におけるネット世論の形成回路 一人びとの行動を誘発する循環ー】

日本の場合で考えると、以前はマスメディアがニュースを流して、受信者で止まっていたわけです。私たちは何かニュースについて感じたことがあっても、家族とちょっと話したり隣近所の人や友達と話したりするだけで消えていく。ごく一部の人が投書したり国会議員や市議会議員に何か陳情したりというようなことで少しリ

アクションするだけで、大部分の人が何を感じていたかということは結局は消えてなくなっていました。それが、ネットが出てくることによって発信者になってコメントができるようになって、そのコメントを載せる媒体としてソーシャルメディアというのが出てきました。その中で、まとめサイトとか2ちゃんねるとか、あるいはそうした媒体で話題になっていることを報じるオンラインの BuzzFeed Japan とか、ハフィントンポストあたりもそうかもしれませんし、J-CAST というメディアもだいぶ古くからありますが、そういったオンライン専門のジャーナリズムが「ミドルメディア」と呼ばれているのですが、そうしたミドルメディアが成立してくることでマスメディアに対しても影響を及ぼすようになります。「ネットで話題になっている〇〇」のようにネットで話題になっているという形でマスメディアに報じられると、またそれが人々の行動を誘発するというような循環があって、これがネット世論の形成回路に日本の場合はなっています。



## 【世代ごとに違いが見えるニュースサイトとのかかわり方】

私が Yahoo!さんの協力を得るに至ったのは、日本のなかで Yahoo!ニュースというのが非常に特権的な地位を持っているということです。結構見ている方が多いのではないかと思います。[KT1]いますが、Yahoo!ニュース、どうでしょうか。月に1回以上は何となく見ますよ、アクセスはしますよという方はどれぐらいいらっしゃいますか。そうですね。大半の方はそうだと思います。300以上の媒体から1日4,000以上の記事が配信されていて、これはやはり驚くべきことですね。もう個別の新聞社では太刀打ちできない状況になっていて、閲覧回数は億単位、ユニークアクセスユーザーも1,000万単位、数千万というふうに考えられます。私の場合2015年4月の7日間、2016年7月の16日間におけるニュース記事、コメント、閲覧情報のデータを解析しているところであります。

ただ、ご注意いただきたいのは、私の研究で、文化、生活、エンタメ、スポーツ、科学の記事に対するコメントは対象外です。もちろんこれらジャンルの記事もコメントも多いですが、今回の研究では硬いニュース、政治、社会、国際、産業、経済の記事とコメントを対象としています。これで記事の割合としては3分の1から4割程度で、コメントになるともう少し多い、半分近くまではあります。逆に言うと、半分以上が対象外になっているということは強調しておきたいと思います。

ここで、こちらの表をご覧ください。Yahoo!ニュースというのは、ニュースを配信するプラットフォームとして非常に強い力を持っているということがわかります。あと、デジタルネイティブと移民という言葉を使っていますが、1980 年生まれ前後を境に、ネイティブとイミгранトとに分けています。それで、実際にこういう調査をすると、ものの見事に世代差が出ます。例えば、2ちゃんねるまとめサイトというとはやはりこのネイティブ層の利用が高く、36 歳以上は少なくなっています。特に 51 歳以上になると非常に少ないということがわかります。逆に、新聞社のサイトというのはイミгранトのほうが強いということです。

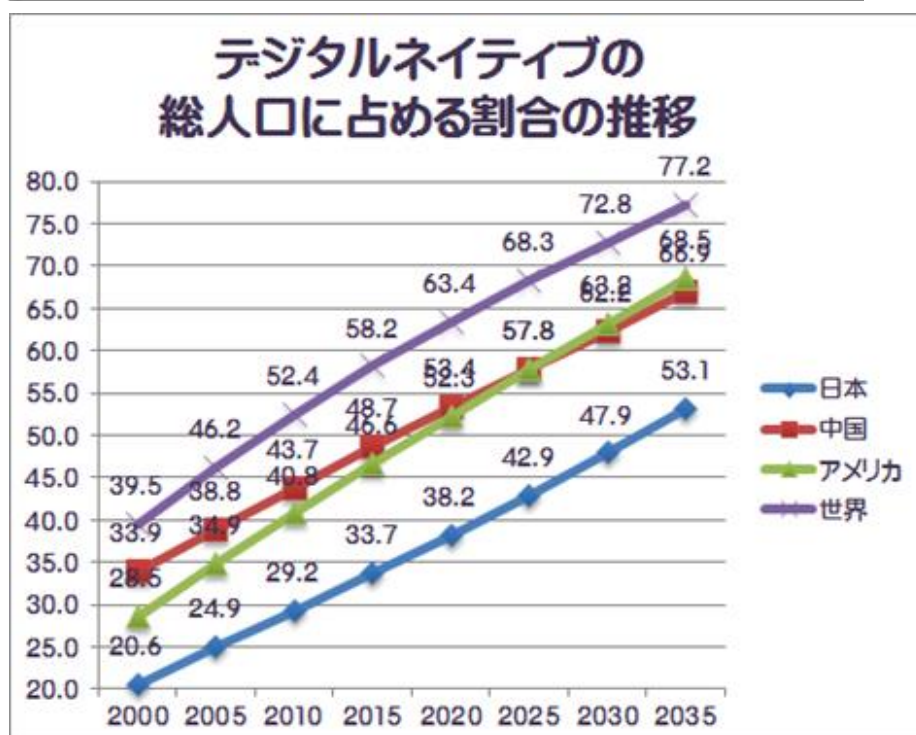
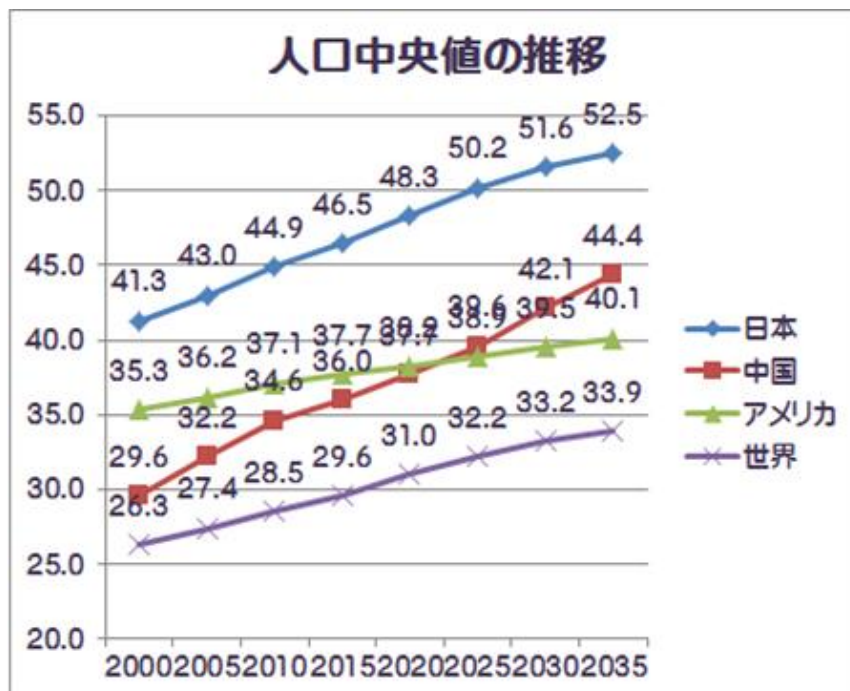
あと、もう 1 つこの調査をして私自身は結構びっくりしたのですが、商品評価、レビュー、コメントに書き込むという項目で、3 割近い方が「書き込みます」と答えています。日本人は、どちらかというとあまり自分からはネットの行動をしないというのがこれまでの通説だったのですが、やはりスマホ時代になって自分で発信するということもあって、拡散とか書き込みとかいうことになってくるとデジタルネイティブ層が結構多くなっています。炎上についてもやはり 1 割ぐらい、10 代後半から 20 代前半は参加していると答えています。デジタルネイティブというのは私の専門なので、皆さんの資料に入れたのですが、時間の関係からここでは省略します。

2016 年 7・8 月、関東・東海・関西圏 16-69 歳男女、有効回答数 1100(立教大学木村研究室調査)	デジタルネイティブ		デジタル移民		全体
	16～24 歳	25～35 歳	36～50 歳	51～69 歳	
Y!ニュース閲覧	60.0	76.5	78.2	72.4	72.5
まとめサイト	47.0	46.5	31.2	11.9	29.8
2ちゃんねるまとめサイト	39.5	31.5	23.8	11.9	23.7
Y!ニュースコメント欄閲覧	38.0	48.0	41.9	40.3	41.7
2ちゃんねる閲覧	33.0	32.5	25.2	13.9	23.8
新聞社サイト	26.0	29.5	35.6	39.1	34.0
商品評価・レビュー・コメント書込	29.0	33.0	28.2	26.6	28.6
ネット「拡散行為」	21.5	12.0	4.0	2.7	8.2
Y!ニュースコメント欄書込	14.0	12.5	9.4	10.2	11.1
個人掲示板・コメント欄書込	13.0	14.0	10.4	9.7	11.3
2ちゃんねる書込	11.5	11.5	5.4	2.0	6.4
匿名掲示板書込	10.5	8.5	4.7	2.2	5.5
ネット「炎上」参加	10.0	8.0	3.0	2.2	4.9
企業掲示板・コメント欄書込	9.0	9.5	5.4	2.7	5.8
ネットアらし行為	7.5	7.0	2.3	1.5	3.8

いずれも、「日に 2、3 回以上」「日に 1 回」「週に 3～5 回」「月に 3～6 回」「月 1、2 回かそれ以下」「以前アクセス／利用／行動していたが今はしていない」「アクセス／利用／行動したことがない」の 7 つの選択肢でたずね、表の割合は、「日に 2、3 回以上」「日に 1 回」「週に 3～5 回」「月に 3～6 回」「月 1、2 回かそれ以下」のいずれかの回答の割合である。

## 【日本のデジタルネイティブの割合は？ ー社会の上積みになれない若者たちー】

ただ、この議論で皆さんにお伝えしておきたいのは、私の授業に出たことがある方は聞いたことがあると思いますが、世界全体で見ると 1980 年以降に生まれた人たちというのは実はもう人口の 6 割を占めています。中国とアメリカもほぼ半分が 80 年生まれ以降なので、社会全体では実はそういう若い、デジタルに適合的な人たちのほうがむしろ主流派になっているのですが、日本だけは幸か不幸かというか、いいことではあるんですよね。つまり寿命は延びている、ただ、一方で子どもが減っているということなので、2015 年の段階でも 3 分の 1 しかデジタルネイティブがいません。つまり、3 分の 2 はイミгранトなんです。すね。





それを象徴的に表すのがこの人口中央値で、日本の人口約1億2,000万人を一番高齢からゼロ歳まで並べて、ちょうど真ん中はどのくらいかというのを表した図なのですが、2000年の段階では40歳ちょっとでした。これでも世界から見るとすごく高齢なわけです。世界全体ではだいたい30歳ぐらいです。30歳ぐらいが真ん中なので、もう30歳を超えたら社会のむしろ上積みになるわけですね。ところが日本の場合には、上積みになってくのが、なんと、おそらく今47歳ぐらいです。これは、特に若い人たちには少し真剣に考えてもらって、皆さんが上になってくるところはおそらく50歳を超えてしまう。つまり、50歳でも社会のピラミッドの下積みで、上積みと下積みを分けてしまえば上積みになれないという状況になります。ですから、個人的には、日本という枠に縛られないでグローバルに考えるということも必要なのではないかと考えています。グローバルであれば35歳といったらもう社会でバリバリなのですが、日本では鼻垂れ小僧みたいに言われるようになってしまう。日本全体が永田町みたいに、下手すると60歳、70歳でようやくまあ一人前になってきたか、というような話になってしまうので、そういう意味ではネット世論に関しても上の人たちが重たい分、どうしても偏った見方になりがちなのではないかというふうに私自身は思います。

### 【Yahoo！ニュースコメントから見えてくる投稿者の行動パターン】

今回分析している2015年のコメントをみると、1週間で101以上コメント、つまり、1日十何件コメントしているというのはわずか500識別IDくらいなんですね。そして、その1%程度のIDが10万コメントという2割に当たるものを生み出しているのです。やはり「ヤフコメ」でもこれまでの炎上研究と同じような形で一部の方が繰り返すことによってボリュームを増している、存在感を増しているということがわかります。ただ、そうは言っても、1日10件までいかないような人たちは95%以上いて、その人たちでコメントの75%を占めています。

ところで、「ヤフコメ」では親コメに対して子コメが付きます。1段階だけですが、親のコメントに対して子コメを付けることができます。分析してみると、親コメだけで子コメをしないという人は7割います。ただ面白いことに、人が言ったことにツッコミだけを入れるという方が1割いるんですね。このあたりは実際に研究が進んでくると、人のそういう行動のパターンというのはかなり細かくわかっていくところだと思います。だから、人が言っていることに突っ込みたいというだけの人が1割いて、コミュニケーションをとる、親コメも子コメもするという人が2割いるということで、言いたいことだけ言うパターン、ツッコミ型、コミュニケーション型というふうに分けると、だいたいその割合というのは今言ったような形で分かれているというふうに思います。

### 【一部の「尖った」投稿者たち ―匿名の陰に隠れて繰り返される過激な批判―】

では、テキスト分析に入ります。テキスト分析は、さきほど言った50万件のコメントを分析していて、まず、1,000コメントあたりに出てくる「日本」「韓国」「中国」という言葉の多さにすごくびっくりしたんですね。「ヤフコメ」で硬い政治とか社会とか国際ニュースに対するコメントではあるのですが、1,000コメントあたり160件には「日本」とい

う言葉が出てきます。なぜ「日本」ということをわざわざ言わなければいけないのか。やはり対象になるのは「韓国」と「中国」という形で、「戦争」とか「謝罪」とか「慰安」、「反日」、「歴史」といった語と共起しています。つまり、政治的な言論空間として中韓関係、歴史、民族、領土問題、ナショナリズム、皇室、沖縄、原発といったものが中心にあります。やはり自分たちは日本人だと。日本人と他者を対立させて、その中で自分たちのアイデンティティというのを主張したいという欲求が非常に強く出てくる場所なのですね。

それで、投稿者が4万数千いるので、これをクラスタリング分析という手法によって分析しました。そうすると、ほぼ1,000の識別投稿者たちが6万コメントをつくり出していて、この人たちは非常にいろいろな意味で尖っています。まず、とにかくもういっぱいコメントしたい、コメントして「いいね」をたくさんもらいたいというので、あまりひどいことは

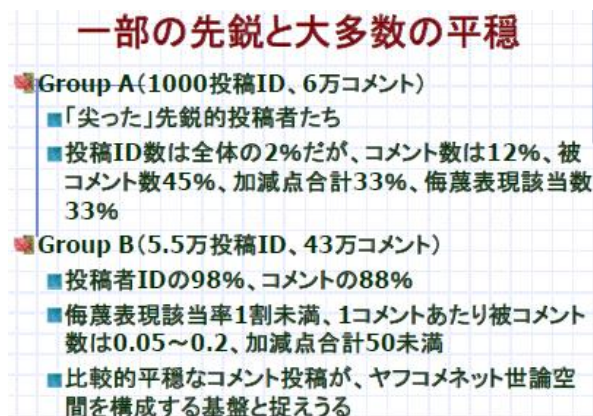
言わないけれどもとにかくニュースが来たらすぐ投稿するというタイプの人たち、それから、「いいね」「悪いね」など気にしないでとにかくどちらかというと侮蔑的なコメントをさんざん投げかけるという人たちが、やはりこの1,000IDという少数の中にいます。この人たちは全体の2%ですが、コメントは8分の1作り出しますし、子コメの45%はこの人たちのコメントに付いています。「いいね」「悪いね」も全体の3分の1はこの人たちのコメントに付いて、侮蔑表現も3分の1を占めます。

他方、それ以外の98%の投稿者たちが、コメントの88%のコメントを投稿しています。時間の都合で、詳細な議論を今回は省略しますが、これらの投稿者たちは、穏当なコメントをしており、「ヤフコメ」の基盤を形成していると考えられます。

「尖った」少数の投稿者に話を戻すと、「いいね」が欲しい人たちをポジティブレスポンスカーズ、とにかく汚い言葉を吐きつけるという人たちをインサルティングアタッカーズと呼んでいるのですが、投稿者数からいうと、ポジティブレスポンスカーズの人たちが4分の1ぐらいで、残りの4分の3の人たち、全体から見ると1%ちょっと、1.数%のインサルティングアタッカーズが非常に活発に動いてひどい言葉を投げかけています。いかにこういう人たちのコメントを抑制できるかがおそらく「ヤフコメ」がよりよくなるためには大切なところだろうと思います。

### 【非マイノリティポリティクスが抱える社会への苛立ち】

ただ、そうは言っても私がすごく気になったのは、残りの98%の人たちです。その人たちのコメントも分析すると、やはり慰安婦問題に関して嫌韓的で、「マスゴミ」というような感じでマスメディアに対する批判的な視点をもっています。少年犯罪で未成年が少年法に守られているということに対しても、ものすごい違和感が表明されているケースが目につきます。このあたりをKHcoderというテキスト分析ソフトで分析すると、共起関係や





語彙のクラスターが見えてきます。

ちょっと今日は充分お話ができないのですが、一部の尖った人が、例えば反韓、反中、嫌中でもものすごくたくさんのコメントをする、それはそれで確かなんです。それは確かにいびつだし、ちょっと偏っていることは間違いないのですが、ただ、残りの 98%の人たちの間にも、少数者とかマイノリティに対するものすごいいらだちが見て取れます。私自身はこうした「ネット世論」を構成する言説

の主調音を「非マイノリティポリティクス」と呼んでいて、これについては社会として受けとめて、何か考えていかないといけないのではないかと思います。「非マイノリティ」ということは、要はマジョリティなのですが、自分が、マジョリティがマジョリティとしての利益を受けていないと感じている人たちがどうもいて、従来のリベラル的なマイノリティポリティクスというものに対してものすごいいらだちを感じて言葉を投げつけるという傾向が出てきています。

少数派弱者が多く の 困難 に 直面 している こと への 配慮 より も、 少数 派 だ と 主張 すること で、 賠償 や 権利 を 勝ち 取る という ふう に 捉 える。 そう いう もの が 「弱者 利 権」と い わ れ る よう に な っ て い っ て、 この 図 が Google トレ ンド で 検 索 し た と き の 「弱者 利 権」 の 推移 で す が、 2005 年 11 月 に ピーク が あ り ま す。 そ れ ま で は あ ま り 言 わ れ て い な くて、 お そ ら く 2004 年 あ た り に 宮 台 真 司 さ ん が 一 度 言 っ て い ま す。 そ し て 2005

年 10 月 に 障 害 者 自 立 支 援 法 と い う も の が で き る の で す が、 そ の 2005 年 10 月 を 境 に し て、 何 か 弱者 で あ る と い う こ と を 楯 に と っ て こ い つ ら 利 益 を 得 て い る ぞ、 と い っ た 屈 折 し た 言 説 が 出 始 め て き ま し た。 生 活 保 護 を 「ナマホ」と 呼 び だ り、 ベ ビー カー の 問 題 も さ ん ざ ん 言 わ れ ま す よ ね。「電 車 に 乗 る な」と い う 話 に な っ た り。 少 年 法 も、 犯 罪 を 犯 し た 未 成 年 者 が 保 護 さ れ て い る と 捉 え た り し て い ま す。 LGBT の 人 た ち に 対 し て も、 私 が 結 構 印 象 に 残 っ て い る コ メ ン ト が あ る の で す が、「少 数 派 の ゲイ の 気 持 ち も わ か る よ。 で も、 ス ト レー ト の 俺 の 気 持 ち も わ か れ」 み た い な、 そ う い う 言 葉 遣 い を す る よ う な と ころ が ネ ッ ト 上 の 世 論 に は 結 構 あ る ん で す ね。 先 日、 バ ニ ラ エ ア で、 奄 美 大 島 の 空 港 に ス ト レ ッ チ ャ ー が な くて、 と い う よ う な 話 が あ り ま し た。 あ あ い う 時 に も、 身 障 者 で あ る こ と を 楯 に と っ て と い う よ う な 捉 え 方 と い う の は、 随 分 コ メ ン ト の 中 に 出 て き ま す。 そ う い う 少 数 派 の 方 に 対 す る 批 判 的 姿 勢、 非 寛 容 と い う の が あ り ま す。

## 非マイノリティポリティクス

■ ネット世論に通底する主旋律

＝非マイノリティポリティクス

■ 「非マイノリティ」＝「マジョリティ」だが、「マジョリティ」が「マジョリティ」として十分な利益を享受していないと感じている人々

■ 社会的少数派・弱者のアイデンティティポリティクスに対する無理解あるいは苛立ち

■ 少数派・弱者が多く の 困難 に 直面 している こと への 配慮 より も、 少数 派 だ と 主張 すること で 権 利 や 賠償 など を 勝ち 取る よう に 捉 える (『弱者 利 権』次スライドの図は、Google Trendでの検索結果。2005年11月にピークがある)

17

## 非マイノリティポリティクス

■ 「生活保護」「ベビーカー」「少年法(未成年の保護)」「LGBT」「沖縄」「中韓」「障害者」など少数派への批判的視線、非寛容

■ 従来のリベラル的マイノリティポリティクスに対して強烈な批判的視線を投げかけ、その人たちなりの公正さを積極的に求めている

■ そうした苛立ち・憤りが、ネット世論として表出される傾向



## 【道徳基盤理論 一書き込みや拡散行為と道徳的モチベーションとの相関性一】

これが一体何に依存しているのかというところで、私自身、道徳基盤理論というのを今研究しています。これに関しては今日ご説明時間はないのですが、政治的な態度というものと道徳的な判断を支えている私たちの感情に関する議論です。

ハイトたちの研究では、リベラルというのは人に配慮したり公正さを求めるという情動は強いけれども、内集団、外集団に分けてとか、権威に従うとか、汚いものを排除するという情動は非常に低い。また生活様式の自由

(抑圧を忌避する)が高い。アメリカの場合にはリバタリアンという人たちがいて、これはとにかく自由を求めて他の情動は相対的に低いという人たちで、保守というのが、いずれの情動レベルも比較的高い人たちです。ハイトたちの主張は、結局、人間の進化の過程を考えるとこの6つの情動というのはある意味でどれも必要なもので、保守的なマインドというのがむしろデフォルトであって、リベラルというのは、ですから少数派なのだと言っています。

### 道徳基盤理論(MFT: Moral Foundations Theory)

- Jonathan Haidtらが2000年代に発展させてきた道徳心理学における理論<http://www.moralfoundations.org/>
- Kohlberg、Piagetなど道徳的判断を理性にもとづく判断とみなす理論への疑問
- Social Intuitionism(社会的直観主義):道徳的判断と行為は、理性ではなく、情動を伴う直観にもとづく
- 理性は、直観に合理性を与え、定型的な態度、価値観、イデオロギーを形成する
- Richard Shweder(文化人類学、文化心理学)の道徳理論からの影響
- 道徳的判断の文化的多様性は、人類社会文化に普遍的な3つの主要な道徳的関心領域(Big Three of Morality, Ethical Discourse)の組み合わせ方による

(c) Tadamasa KIMURA

19

### 6つの情動ベクトル

- Haidtらは、道徳的判断を生成する基盤として6つの情動ベクトルを区分

<ケア/危害>	弱者(乳幼児)の保護、思いやり
<公正/欺瞞>	共有された規範に基づく正義 (a) 平等・公平さ、(b) 比例配分、因果応報
<内集団(忠誠)/背信>	所属集団への忠誠、誇り、裏切り者への怒り
<権威/転覆>	伝統、権威(正統性)への服従、敬意
<聖/不浄>	汚辱の忌避、純潔・神聖さの遵守
<自由/抑圧>	独裁・抑圧への憎悪 (a) 経済的自由、(b) 生活様式の自由

(c) Tadamasa KIMURA

20

### Libertarian/Liberal/Conservative

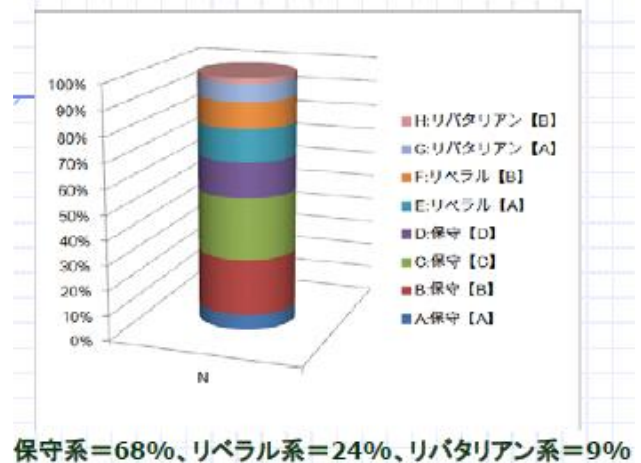
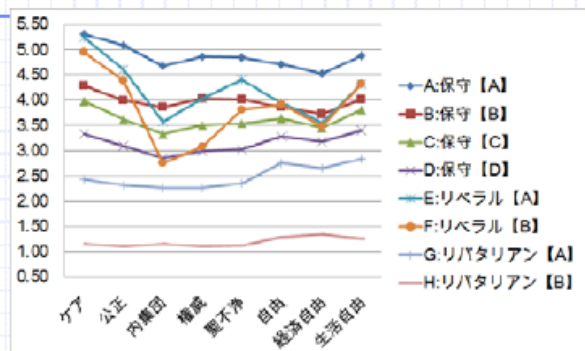
- 保守:6ベクトルいずれも高い
- リベラル:<ケア><公正>は保守以上に高いが、<内集団><権威><聖不浄>は低い;<生活様式自由>は高いが、<経済的自由>は低い
- リバタリアン:<経済的自由><生活様式自由>は保守、リベラルよりも高いが、それ以外のベクトルは最も低い;情動レベルが低く合理的;個人主義的で集合主義傾向が低い
- YourMorals.orgにおけるオンライン調査;回答者数15万人(女性45%,年齢中央値34歳)
- 保守=13.5%;リベラル=61.5%;リバタリアン=7.6%

(c) Tadamasa KIMURA

22

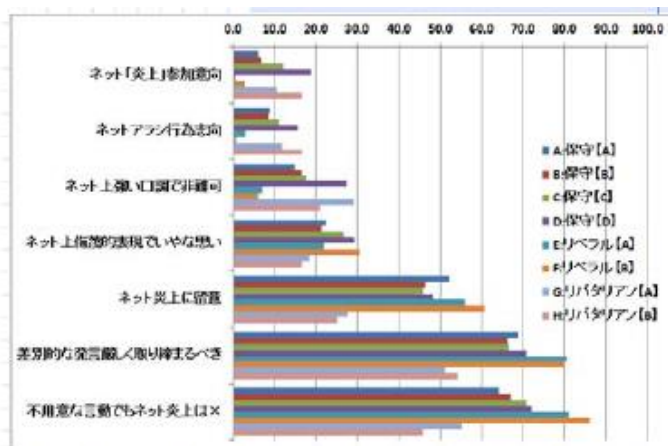
私の研究でも、実は日本でもその傾向は認められていまして、やはり保守的な、どの情動レベルも強いという方々と、ケア・公正は高いけれども内集団は弱いというリベラルパターンの方々、あと、アパシーがいるんですね。アパシーを、私自身は日本型リバタリアンと考えているのですが、この3つの要素で分けると、実は私のウェブ調査の結果からは、68%が保守に分類されます。リベラルはもう4分の1ぐらいしかないという状況です。

## 日本における政治的志向性とMFT

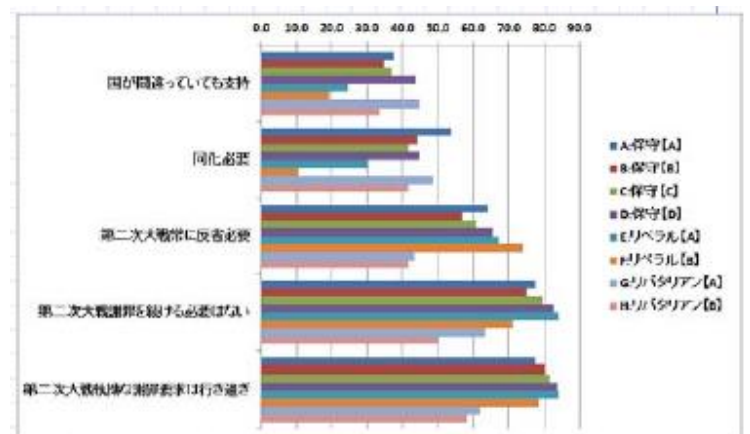


これも今日は詳しくご説明できないのですが、面白いのは、例えば炎上への参加を見ると、リバタリアン的な方がすごく参加するんですね。あと、保守で情動の弱い方というのが参加して、リベラルはほとんど参加しないというようなことが、一応私の研究からわかってきています。「アラシ行為」というのもそうなのです。

道徳基盤理論で、そういう書き込みとか閲覧の行動が説明できるというのが、私にとってもものすごく興味深いところです。つまり性別でもないし、年代でもないし、年収でもないし、ネットに書き込むとか拡散しようとかいう行為は、実は私たちの道徳的なモチベーションというものに大きく依存している可能性があるというのが私の研究からわかってきたことで、自分なりにすごく面白いと思っています。



27



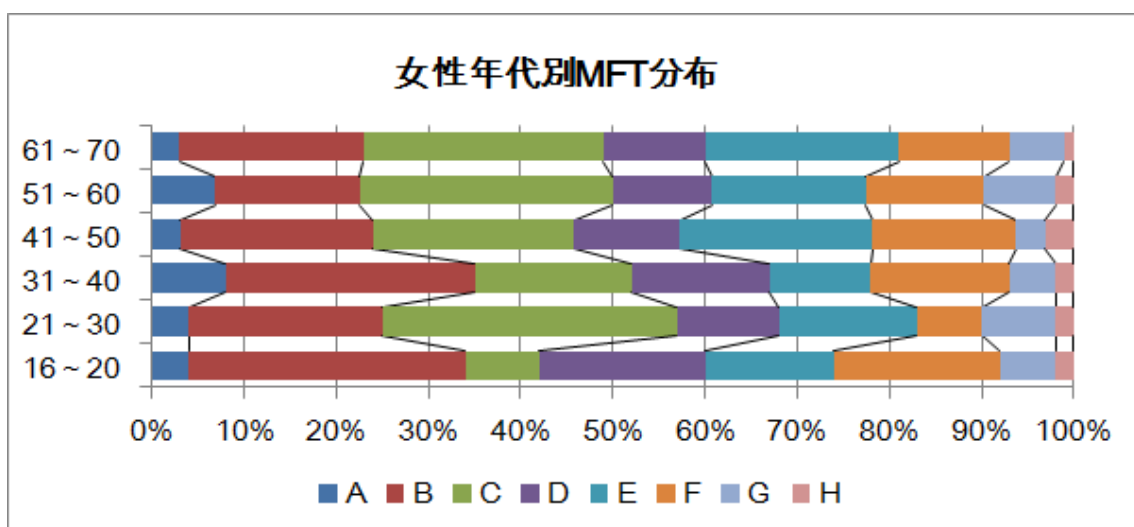
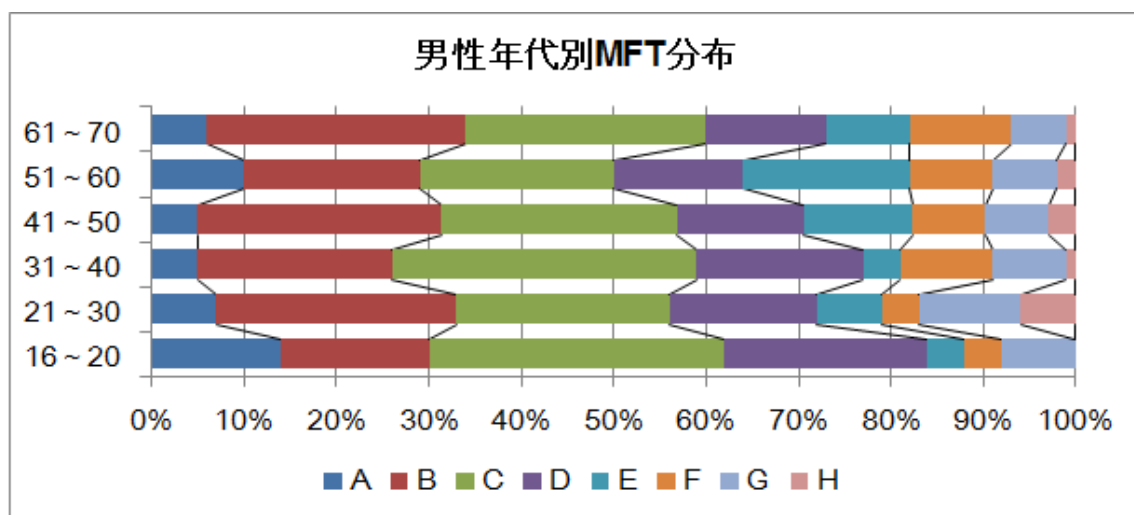
28

## 【今私たちに求められるもの

### ー社会の変化に敏感になり、どう振る舞うべきかを見極めるカー

これからの社会を考える上で私が気にしているのがこちらの表です。このA、B、C、Dが保守で、E Fがリベラル、G Hがリバタリアンなのですが、女性の、やはり 40 歳以上の方々というのはまだリベラル色がそれなりに残っています。10 代の女性というのも比較的にリベラルはあるのですが、20 代、30 代の女性になるとリベラルの要素が減っています。あと男性に目を移すと、特に男性の 10 代はリベラルが絶滅危惧種になりつつあって、どちらかというとはやはりリバタリアンの部分が 20 代に特に強まってきているということがわかります。そういう意味では社会全体が非常に個化（アトム化）して、目先の利益とか利得という形で動くような部分というのがどうしても出てきてしまっているのです、人権やハラスメントということで考えたときにもそうした社会の状況は受け止めて、その上で自分がどう振る舞うべきか、今日の話に引きつけて言えば、先ほどお話したように炎上の構造というのはだいぶんわかってきたので、いかに自分がそこに巻き込まれないようにするかということを考えていただければと思います。

ということで、私のお話とさせていただきます。ご清聴どうもありがとうございました。





## 【中高生と SNS とのかかわり ―教育の現場から見えてくるもの―】

○内田 こんにちは。今、ご紹介にあずかりました立教池袋中高の教務部長という立場になっていますが、数学の教員をしております内田と申します。お忙しいところご参集くださいましてありがとうございます。しばらくお時間をちょうだいして、お話をさせていただければと思います。

私自身は、このような立場になる前からずっと学校の教務システムの設計をしたり、インターネットの利用に関して、生徒指導にどのように活用していくのかというようなことに結構携わっていたものですから、こういったもの（ハンドブック）を学校で作っています。これは少し古いバージョンなのでまた来年度に向けて改定をしないといけないのですが、この手のものが

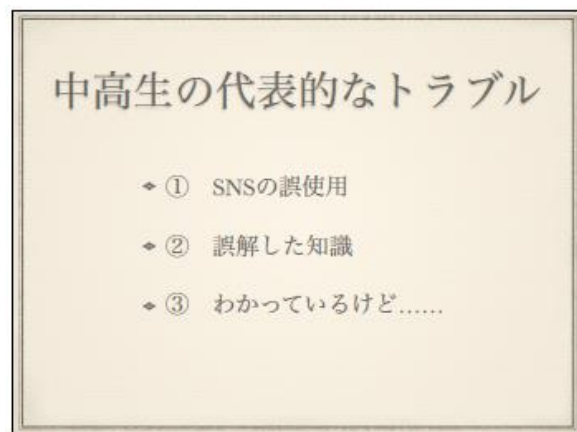


やはりいろいろな中高の中で話題になりまして、これをベースに東京都内の私立の学校 12、13 校がこのようなハンドブックなりリーフレットを作るようになりました。ふたを開けてみればニーズがあったのだなというところです。いろいろなところが集まって、ちょっと見せて、みたいなところから始まったところもあるわけです。

ここにスタートとして書いてあるのですが、学校のネットワークはきちんと管理されていますよということが書かれています。このハンドブックはあまり生徒にオープンにするものではないということがあってレジュメには載せていないのですが、学校の中で使うと全部ログは取られていますよ、だから何か変な書き込みをしても、全部ログした出席番号でわかっていますよということです。これは今も続いています。あとは、基本としてはルールをよく理解してきちんとやりましょうということで、このあたりが一番大きいところ、気をつけてほしいこと、それから、配慮してほしいこと。こういったことを基本に考えて下さいというための本であって、あくまでも捕まえて何か処罰するのがこの本の目的ではないですよということを最初に載せています。あとは細かいルール、プライバシーを守るとかいろいろなことが書いてありますが、とにかくこの前文が 1 つ、学校のポリシーとして存在するわけです。

中高生の代表的なトラブルというところでいうと、もうとにかく誤使用、それから誤解。あと 1 つあるのが、わかっているんだけどな、やっちゃったな、というところです。

ということで、先ほどの木村先生のお話の中でも、そうか、裏側にはこういう人たちが、こういう一部の人たちがいることでこうなるんだなというのがものすごく腑に落ちるといって、ストーンと落ち



ることがたくさんありました。これに巻き込まれないようにすればいいんだと、私も今ちょっと思いました。そういう話を今度、中学生、高校生にしてあげればいいんだというふうにも思ったわけです。

さて、皆さん方、ここに5つアイコンがあります。ちょっと聞いてみましょう。一番左側のアイコンを知っている方。左から2番目、この「f」というもの。それからこの真ん中のグラデーションのかかっているもの。右から2番目の、この黄色いアイコン。減りましたね。一番右の、この「in」と書いてあるもの。「in」を知っている方は随分古い、SNSとしては多分、海外と交流をする



とか学術的なものとかいうところで接点がないと、この「LinkedIn」のアカウントを持っている人は少ないのではないかと思います。それから、この黄色の「Snapchat」。最近、旬のアイコンですね。なぜこれが最近はやり始めたのかということ、少し考えていきたいと思っています。そして真ん中は「Instagram」。Instagramもパソコンで見られますが、パソコンでデータをアップロードしたり、デリートすることはできません。つまり、スマートフォンが対象になっていて、その場で見たものなど、あくまでも個人の情報を皆さん方に見てもらおうというスタンスのものでですね。左から2番目の「Facebook」はある意味、匿名ではありませんというものです。この鳥さんは「Twitter」、匿名なんだけれどもなあという誤解ですね。全部ばれるのでね。匿名性だけれども、本当なの？というところですね。Twitterは担保していないですからね。というところで、最近の話題から歴史的なものまで、いくつかSNSを見ていただきました。私はInstagramやっていません、Twitterやっていません、Snapchatやっていません。Facebookは個人的にちょっとやっています。LinkedInは昔からのつながりがあるのでやっています。ということで、これらはアプリなんですよね。でも、LinkedInなんかは、逆に言うとパソコンのほうが使いやすくなったりします。Facebookはどちらも使いやすいですね。こうして見てくると、実名性の高いものほどPCでもスマートフォンでも、どんなところでも、いつでも更新ができる、利用できる環境になっていて、お手軽になればなるほど匿名性が強くなっていくのかなと思っています。

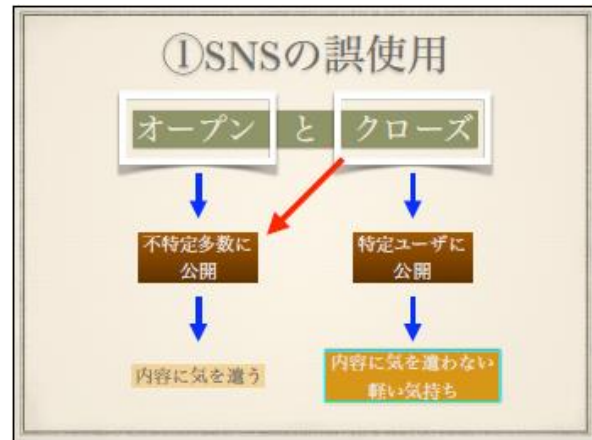
### 【中高生の代表的なトラブル① SNSの誤使用】

まず、この3つのトラブルのパターンを、1つ目から少しずつ見ていきたいと思います。これは皆さん方にも当てはまるかもしれませんので、大学生にとっては「えっ、こんなものわかっているよ」というようなお話になってしまうかもしれませんが、少しお時間をください。

まず「オープンとクローズ」についてです。オープンとは、一般公開されているもので、不特定多数に公開されているということもあるので、内容に気を遣うことが非常に多いと



というのがうちの生徒の話ですね。クローズは、仲間内とか友だち、家族というスタンスになるので、特定ユーザーとの連絡に使います。ですので、気を遣わなくてもいいような写真や文章を結構気楽に使っています。そこのところがクローズの安心感なんですね。一番彼らがやるミス、これはほかの学校さんの話を聞いてもそうなのですが、クローズのアカウントだと思ってやっていたらグループがオープンになっていたということです。つまり、クローズで身内だけ、身内というのは家族という意味ではなくて、自分たちの本当に仲のいいグループのことですが、そのごく親しい人たちのためだけの情報共有であるものが、完全に全世界にボーンとばらまかれてしま



まうという人為的ミスです。グループ名が非常によく似ていたりといったようなことから、間違っ

てそちらに送ってしまった。でも半分クローズなものもあったりするわけです。自分たちの本当の身内だけれどもさらにちょっと広がった、個人的な友だち同士ではなくてサークル活動のようなもう少し範囲が広がっているところにドーンと送ってしまったら、本当は見てほしくないような人たちにも映像なり画像なり文字が行ってしまっ

て、そこで「なんだあいつは」みたいな形になってくる。「なんだあいつは」というのは身内ならいいですが、それがそうでない人たちにとっても「なんだあいつは」となると、先ほど出てきたような「炎上」に直結するわけです。

大学生ですと、例えば先ほどのアルバイトで炎上するようなバイトテロのようなものがありますが、中高生はバイトに行く子たちはいますが、さすがにバイト先で冷凍庫に入ったりとか何かを

するところまではやらないというかそこまでの根性はなかなかないので、そういうバイトテロのようなことに巻き込まれることはないですが、後でお話しますが「あいつちょっとおとしめてやろうかな」というちょっとした気持ちからものすごく大げさで大層なことにま

でなってしまうという、ふたを開けたら大変なことになってしまったということはある。具体的な例をご紹介しますが、本当にごくごくリアルな例なのであまり資料には載せられません。今日は池袋中高の卒業生が何人か来てくれていて、「あいつのあの事件のことじゃないか」とピンと来る可能性もありますので、ちょっと濁してお送りします。

ある生徒が缶チューハイを持って、何となく赤っぽい電灯の下で「ちょっと酔っ払っちゃったぜ」と写真付きでコメントを書いてアップしました。それは本当にごく仲のいい親しい友だちに、飲んでもいないのにちょっとそうやって強がったんですね。それを身内に送ったつもりが、オープンでした。飲酒事件みたいになって大騒ぎになったという、これはもう本人の単純なミスというか、やらないきゃいいことまでやってしまったということもあるわけですが、そういう例です。

私たちが中高生のころは、居酒屋に入るとい

うのはものすごく勇気が要って、親とでもなかなか居酒屋に行くことはなかったですが、今、中高生が普通に居酒屋に入っています。

お酒は飲めませんが、普通に食事はできるので、お腹がすいたからといってごはんを結構安く食べられます。そういう状況で何をやったかという、氷のタンブラーを置いて、ウーロン茶をわざわざ水で薄めたジョッキをいっぱい並べて、やきとりだ何だかつまみを置いて乾杯の写真を撮りました。はたから見ると、何を飲んでいるか分からない。どう見ても居酒屋。「こういう打ち上げをやった」と載せたら、クローズだったのですが、鍵がかかっていませんでした。鍵アカではないところに行ってしまったということがありました。かわいいといえはかわいいのですが、結局、その生徒たちは自分たちだけの世界で処分なり学校の中での指導を受けるだけですから炎上という話ではないですが、高校生にしてみたら、学校の生徒部長とか指導部系の先生方に呼ばれて「何やっているんだ、これは」みたいに尋問じゃないですけどもそういう話を聞かれるというのは、自分たちがやってしまったことだけれど結構面倒くさいとかやばいな、失敗したなという思いがある世界です。



ただ、中高生の場合は、ネット以上にロコミというネットワークが非常に強いので、数人知っていれば次の日にはもうほとんど全員がその事実を知っています。今は、そういう事実がわかった瞬間、LINE で 20 秒後には全員知っているという、その速度が、拡散のスピードが明らかに変わってきています。少し前は、「えっ、そんなのあったのか」と知らない子がいたのですが、今はそれを知らない子を探すほうが大変な時代です。そういう意味では、表向きは知らないふりをしていますが、多分何かの事件が学校の中や友だち関係の中であったよねと言われたら、自分の同学年に限らず下級生にも、あるいは立教大学に来ている OB にまで知れ渡っている可能性があります。ある意味で立教というクローズの世界かもしれませんが、その後、大学に行っても先輩から「おまえ、あのときこんなことやったんだって」とふだん接点のない大学生に言われたりとか、クラブの後輩でもない下級生に「うわさを聞いたんですけど」と言われたというのは結構インパクトのあることです。情報の拡散性の早さはもう昔からは考えられないスピードがあるなというふうに思っています。

もう1つは、クローズ性ですが、クローズだからこそというのが、多分、今一番話題になっているところだと思います。クローズだから安心という中で、それを逆手に利用してということになるのだらうと思っています。もう少し具体的に言うと、LINE のグループの問題ですね。仲間はずれとまでは言わないですが、ちょっとからかってやろうかという事例がありました。クラブ等々で大会があつて、たまたまミーティングに来られなかったA君としましょうか。みんなミーティングの内容を知っているのですが、A君だけがその内容を知らないという状況で、集合時間を違う時間で流したんですね。8時集合を、7時半にすれば笑い話で済むんですよ。「おまえ、7時半に来たのかよ」とか言って。それを8時半で流したんですね。A君だけ8時半に来ました。エントリーできず、大会に出られませんでした。これは結構大きな問題になって、大会本部も困りました。困ったけれど

「学校の中で起きたことなので、学校として対応してください。大会本部としては、その生徒を救済するということはありません」という話でした。結局、その生徒はもうその大会には出られませんでした。やってしまったチームの面々は「あいついつも来るのが早いから大丈夫だと思った。30 分以上前にいつも来ているから、ギリギリかもしれないけれども 30 分前に来れば大丈夫と思った」と言っていました。彼もそのつもりで、30 分前だけれども、8 時 5 分か 6 分に来たわけです。ジ・エンドですね。なので学校としてもどうしようもなく、非常に苦しかったです。A 君をおとしめるつもりはなかったと言っても、結果的にはものすごいことになってしまって、非常に後味の悪い事件です。

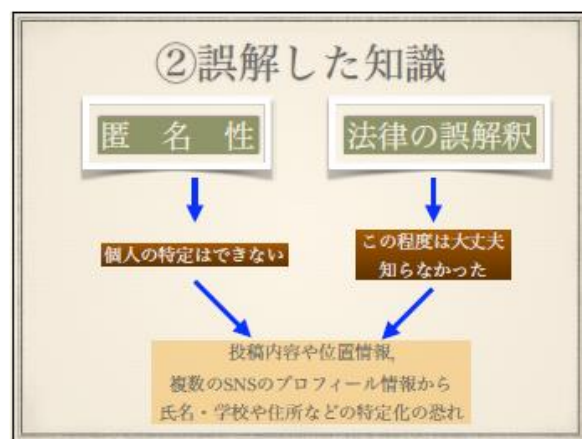
あとは、もうちょっと悪質にすると、同じようなパターンで A 君には集合時間を送らない、あるいはその情報を流すということ。「今日の大会中止」とか「延期になった」というその情報ですね。そういう話になると非常に複雑になってきますし、ただ単に流しちゃったというだけでは済まされない大きな位置付けになってきます。これまでお話しした事例について、どういう処分になったかというのはちょっと置いておきましょう。

そして、いろいろな学校が何を思い始めたのかというと、LINE 禁止という措置を取り始めたわけです。いいか悪いかは別ですよ。いいか悪いかは別にして、LINE 禁止という学校が出始めました。そもそも携帯電話所持禁止とかスマートフォン所持禁止といっても、家で契約することまで学校としては制限できませんから、基本は学校に持ち込まないということなのかもしれませんが、本当にそれでいいのかなというのがあって、今、逆説的にいろいろな学校が動き始めています。

## 【中高生の代表的なトラブル② 誤解した知識】

匿名性についてですが、Twitter は匿名で登録できますので、個人を特定できないという安心感というか過信があります。でもそれはすぐにばれます。それだけは皆様方もわかっておいたほうがいいと思います。調べる気になった人が真剣にツールを使って調べ始めると、ひょっとしたら名前までわかってしまうかもしれませんね。住んでいる場所、あるいは通っている学校、通常使っている通学経路等々まで簡単にわかってしまいます。

もし、同じアカウントで Facebook とか Twitter をやっていたとすれば、いくら Twitter が匿名であったとしても Facebook で自分の名前を載せていたら、もうあっという間にわかってしまいます。例えば、自分のよく行く近所で「こんなところに行ってきました」というような記事を実名で載せていたとします。Twitter で、わからないだろうと思って「こんなところに行ってきました」と言っても、実名で書いてあるところに同じものを載せていたら、この辺に住んでいるんじゃないの？ということは明らかにわかります。みんなそこを勘違いしています。匿名性と言いながら、Twitter のアカウントに「rikkyo〇〇」なんて書いてあったら、もう明らかに自分の所属を言っているような



ものです。なので、どうしてこういうアカウントを作るのかなと思うのですが、作った本人いわく「立教にしておけば、立教の学生はいっぱいいるから平気だと思った」とか、変な自信というか過信があるんですね。皆さん方はそんなことはしないと思いますが、特定できないというのはうそです。プロフィールとか色々なことを書き込んでいくと、それをたどって探す、先ほどの木村先生のお話の「尖った人たち」になるのかもしれませんが、本当にそういうことが大好きな人たちが見始めるとあっという間に見つけられます。何か事件があったときに、素人の私からみてもまあまあやりそうな生徒の顔が浮かぶわけです。そのあたりは大学の先生と中高の教員の、一人一人の生徒との距離感の違いではあると思いますが、あの生徒だったらどんなアカウントになるかなと想像して「当たった」というようなことがあるわけで、「頼むからやめてくれない？」って言うと、「なんでわかるんですか」って、「いや、わかるよ」ということもあるわけです。

特定化されるとどうなるかということについて、2ちゃんねるで起きたある事例をお話します。何をやったかという、電車内で盗撮をして「こんなくそオヤジ」とか「こんなくそババア」とか、すみません、言葉が悪くて。そういうことを勝手にアップしているんですね。うちの生徒の中にもまだ2ちゃんねるをやっていて、定期的にスレッドを立てている生徒が時々いるのですが、載せている路線がある程度固定されているので、この生徒かなとある一人の生徒の顔がピンポイントで浮かびました。ただ、どうもうちの生徒のようなのですが、実はうちの生徒じゃないんじゃないかなというのもあって、学内の情報系でリサーチをする教員同士で話をしました。調べていくうちに、それは試験前とか試験中の早い時間しかやらないとなったときに、試験の日が違ったんです。そこでうちの生徒じゃないということがわかりました。その2ちゃんねるのスレッドの中では、「おまえなんかさっさとサイバーパトロールで捕まってしまえ」みたいなことがガンガン、ガンガン書かれて、「特定してやる」というような書き込みがどんどん、どんどん続いて、「どこの学校だ」といって幾つか学校の候補が挙がっていて、「ここまでおれは調べたぞ」みたいなことまで載っていたりするわけです。そこまでになってからそのスレッドはなくなったので、本人は相当危機感を覚えたのだと思います。2ちゃんねるのスレッドですらそんなことが起こることなので、先ほどのこの法律の解釈ではないですが、この程度は大丈夫というのはもう許されない時代になっているのかなというところですよ。

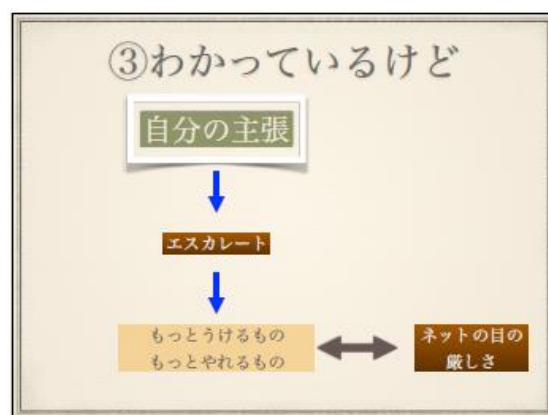
あとは法律の解釈でいうと、学校の行事で会社訪問というのがあって、IT系の会社に行く生徒たちの何人かが、まだその当時2ちゃんねるをやっていて、「今度〇〇会社のこういう人たちに会うので、聞いてみたいことがあったら僕が聞いてくるから」というのをアップしました。すると「こういうことを聞いてきてよ」というのが載ってきて、「わかった、わかった」みたいなやりとりをしていたわけです。その会社はIT系の最先端に行く会社だったので、それはある意味、マル秘の企業情報の漏えいにかかわってしまうことだったのです。たまたまその会社のかたが、自分たちの会社の名前が2ちゃんねるに上がっているということに気がついて、学校に問い合わせが入りました。「こんなことを書き込んでいる学生がいるみたいですが、立教さんしかないですよ」という話になって、2ちゃんねるに書き込んでいる日付と訪問する日が時間まで一致していますから。なので、わかっているわけですね。このあと学校はどう対応をしたかという、2ちゃんねるに削除



の依頼をしたわけです。それが今度は炎上のネタになってしまいました。企業の見識が非常に狭い会社であるという内容です。「そんなことを言われたって、どうせ中高生が書いていることなんだから平気だろう」とか、「それをわざわざ削除するような削除要請をこの会社はした」みたいな形になってしまいました。実際に削除要請したのは教員なわけです。その会社と学校とで協議をして、今回のこの件に関しては、この2ちゃんねるのスレッドの中ではもう一切、削除要請を取り消すこともしないし、そのまま放っておこうということになりました。本人には、その後、会社訪問等々に行っただとしてももうそんなことを流してはいけないという嚴重注意で、企業のかたはというと、「人のうわさも75日で消えるのを待つ」ということを言っていました。本人にしてみたら、その特別な場で知り得た情報を不特定多数に公開するということに対して、みんながこんなの知っていたらいいだろうなと思ってよかれと思ってやったけれども、それがとんでもないことになってしまったということですね。ちゃんと知っていればわかるのですが、そのあたりのところが非常に弱いところ。匿名じゃないの？というのと、そんな法律があったんだというところで、2つ話をしました。

### 【中高生の代表的なトラブル③ わかっているけどつい…】

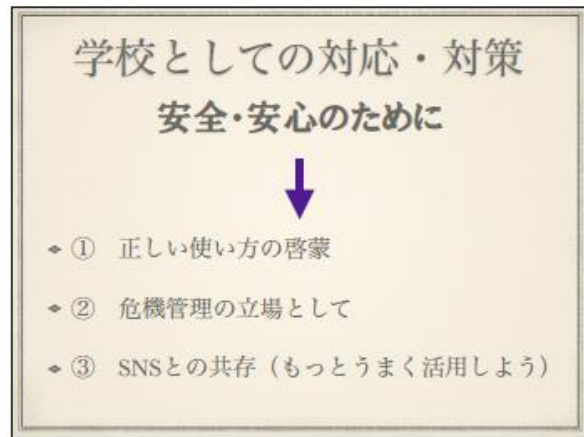
もう1つ、先ほども出てきましたが、バイトテロみたいなものですね。うちの生徒の中にも YouTuber がいてかなりのアクセス数を誇っているんで、この間も「おい、YouTube やっているんだって？ 見たよ、おれも」と言ったら、顔真っ赤になっちゃって、「もう足洗おうと思っているんですけど、どうしたらいいかわからないんです」と言って引き際がわからないんですね。「どうして？」って聞いたらこの彼が言ったのは、やはりネットの目の厳しさということです。だから、ウケるためにはもっと過激に、もっと細かく、もっとすごいことをしなくてはと、寝る間も惜しんで勉強せずに動画のアップばかりやっていたら、テストの点数が全部赤点になってそれでばれたということがありました。エスカレートしていくと「おい、



もう、ちょっといいかげんにしたほうがいいんじゃないの？」と肩をたたいてくれる人が、ネットの世界の中にはいないわけです。まわりにはリアルな友人関係があるわけですが、友人が「おまえ、もう、テストでこれだけ点取れないんだからやめておけよ」と言っても、そういうふうピンポイントで進んでしまっているときには聞く耳を持ってないです。そうすると、子どもにタバコを吸わせたりとか、先日もある芸能人さんが線路の上を歩いてそこで写真を撮ったら、「それは鉄道法違反じゃないの？」と言われてたりというのがありました。私もこの間、北海道に校外学習に行ったとき、「網走のところって1日4本しか電車が通らないから、この線路の上で座って見ていたいな」みたいなことを思ったのですが、そういうことをアップしてしまうと、変な言葉尻をとるわけではないですが、そこに突っ込んでくる人たちがいる。そうなるともう引けなくなってしまいます。

### 【学校としての対応と役割 ―SNS を安全に使っていくために―】

学校としてはこのような立場なのですが、そうすると何がポイントになるかという、やはり正しい使い方というのをきちんと啓蒙していくということです。危険だからだめというのは簡単なのですが、危険だからだめで終わったのでは、そういう中高生が大学生になったらどうなるのか。中高というのは守られた世界だと思うので、その守られた世界の中でちょっと痛い思いを経験しておく、大学生になってからそんなに心配することはないんだろうな、と同時に中高の現場の責任も大きいなというふうに感じています。こんなふうに考えている学校は本当に少ないです。ノーと言えば、そのとき簡単ですから。使うなよというのは簡単ですからね。でも、そうすると生徒たちはどうしてだめなのかと反発して、今度は裏に行くというところがあります。



もう1つ、学校としては危機管理という立場もあります。私が一番言いたいのは、SNSとの共存をちゃんと伝えて一緒に使っていったら、どれだけ便利な、快適な世界になるだろうということなので、その差をきちんと分かってもらえたらいいなということで、2つ紹介させていただければと思います。

### 【正しい使い方の啓蒙 ―ネットリテラシー検定について―】

1つは、「ネットリテラシー検定」というものです。最近できたばかりの検定ですので、今日はパンフレットを置かせていただきました。立教大学の卒業生でもあり、経営学部の非常勤講師でもある人たちが作りあげたものです。これは〇×式なのですが、サンプルを見てやるだけでも結構頭を使います。こんなことを知っておくことが本当に抑制になるのかというのは別にしても、ああ、こんなところにひっかかることがあるんだなということを知っておいてもらえれば、随分と印象が違いうだろうと私は感じています。だから、色々な学校から問い合わせが出始めたというのは非常によくわかるのですが、学校全体として実施するとなるとまたそれはそれなりにハードルが高いかなとは思いますが、こういうものがあるということで紹介させていただきました。





## 【危機管理の立場から ―スクールガーディアンという取組み―】

もう1つ、危機管理というスタンスで、スクールガーディアンというシステムがあります。これは、実際にはアディッシュという会社が運営しています。今年の2月頃に日テレで紹介されたのですが、このスクールガーディアンの活動内容を中高生の立場から見てみると「鍵アカまで全部見られているんじゃないの？」ということになるのですが、この会社は「そのあたりは会社の極秘事項なので教えられません」というような話をしました。教えられませんというのが、彼らにしてみたらやっているんじゃないの？とイコールなってしまいました。やっているとも言えないし、やっていないとも言えないところなのですが、このスクールガーディアンというものが多分、システムとしては一番大きいかなと思います。私立学校で180校が導入とありますが、これは95%が女子校です。



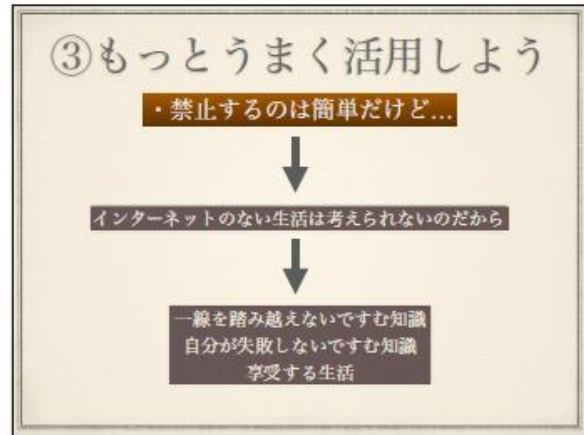
このスクールガーディアンは学校の危機管理としてのシステムですが、あくまでも先生方が、A君の動向がおかしいよねとか、先ほど言った、何となく距離で生徒たちの顔が浮かべばいいのですが、わからなかったらもう調べようがないから代わりにやってくれる人たちがいたらありがたいよねというところから生まれたので、鍵アカを何とかしようとかいうスタンスのものではありません。おそらく、私としては一番下の4つ目の、まわりの大人のリテラシー向上、これがやはりここの会社の役割だろうと思っています。講演にはどんどん行ってくれますので、来週の水曜日にもうちの中学校3年生を対象に、ここの会社のかたが話をしに来てくれます。特に書き込みや裏サイトを探す、闇サイトを探すような依頼はしていませんが、学校としてこういった活動を行っているということでご紹介しました。

それと、この3番のソーシャルメディアを活用するという認知度ですね。これが非常に重要です。例えば、公立の学校はどうなっているかという、教員は生徒や保護者と個人的なメールをやり取りしてはいけないとか、保護者も絶対に広報で使われるような学校のオープンなメールアドレスしか使ってはいけないというのが、ほとんどの都道府県で行われていることです。この間まで埼玉県は緩かったのですが、ある事件がきっかけで、教員と生徒あるいは保護者とのメールのやり取りは禁止というように教育委員会が決定しています。

## 【SNS と共存し便利で快適な生活を享受するには】

では、ふたを開けて、自分はどうなのかなという、私はLINEをやっていませんが生徒はしていますから、朝来て、伝達放送とかで伝達するのが大変なときには、クラブの生徒に伝達の紙を入れておいて、今日3時半からミーティングをするから、声をかけておいてねと伝えたら、その生徒が「3時半からミーティング、内田先生から」とLINEでパッと

流して、時間になったらみんなそろっているわけです。あるいはもう少し言うと、オープンで外に行く大会で、雨でも集合しないといけないような部活があつて、どう見てもこの雨なら中止だろうと思つても、まず集合しないと翌週の延期になったときの大会に出られないということがあつたと、「今日は雨天で中止になったので来週」というのを顧問経由で流しています。そういう規制は入っていませんので、うちの学校では結構流しています。私も保護者とのやり取りで、「最近、うちの息子の調子がおかしいんだけど」というようなメールが来ることがあります。朝、電話で受けたらいいだろうと思つても、受けられないときもありますからね。そういう活用をすればいいのに、何か問題が起きたら困るから、ある意味、危機管理で禁止というスタンスをとることについては何とかしないといけないだろうなと思つています。



なぜ禁止ということになるのか。インターネットのない生活はもう考えられないじゃないですか。IoT だとか自動運転とか、もうそんな世界に、そんな時期に、そんな世の中になりつつあるのに、学校の現場だけ LINE 禁止とかメール禁止とかいう本末転倒なことになっています。ただ、それを失敗したときのリスクがあまりにも大きいので、躊躇するところが非常に大きいのだと思います。

### 【言葉の重みを認識すること 一想像力を働かせ、読み手の立場を考えられるかー】

今、危惧しているのは、「遊び」がないということです。例えば、「遊び」というのは、車のハンドルの遊びみたいなもので、その自由度というか、振り幅がない。相手の言葉を、その言葉尻どおりにとってしまう。では、日本語をきちんと理解しているのかというと、していない。日本語の重みというか、もう少し言うと昔の人が考えていた言葉の重みを今の日本人というのは、私もそうですが、認識をしていないし、認識をする教育を受けていません。英語、英語とって、日本語の表現だとか、日本語の言葉の重みを学ぶ授業はどんどん減っています。うちの学校もそうですね。国語の授業は週 3 時間ですが、英語の授業は週 7 時間ありますから。では、日本語だからわかっているだろうという、いや、それはきちんと教えないといけないなと今は思っているわけです。

そういう意味では、日本人の言葉に対する寛容のなさというのは、今、非常に大きいだろうと思つています。例えば私がこうやってこの場で話していることは、この場で消えるんです。でも、Twitter でもメールでも何でも文章となると、同じ文言でも印象が変わりますよね。同じ内容でも、口で言うのと文章で読むのと、それから手書きの文字で手紙文で見るのとでは全然印象が違ふわけです。言葉で言うと、軽いと言ったら変ですけども「ああそうだよな」となります。『てにをは』を間違つてしゃべっても人間は理解しますが、『てにをは』が間違つたメール文が来ると「何だこれは」となるわけですね。そこが人間の言語に対する認識の違いだろうと思つております。それが手書き文字でお礼状な

りお詫び状が届くと、その人の思いというのは行間から伝わってきますが、メールのフォントで表現されている文章を見たときにはあまりにも無機質になってしまって、そういう個人の思いといったものが消えてしまいます。Twitter は文字が少ないということもありますが、メールに関して、あるいはブログなどで自分の思ったことを自由に表現するとき、読み手は、その読み手の自己価値観や日本語能力等々で判断をするわけです。ですので、その言葉の重み、自分がこういうふうに書いたら相手はどう思うだろうということをきちんと意識して読み直すとか、書き直すとか、やはりメールの文章であったとしても校正をするぐらいの努力をしないと、自分の言いたいことがきちんと伝わらないのではないかなと思っています。

私はパソコンでメールのやり取りをしています、生徒は携帯で「今回、こういう原稿を書きましたので、よろしくお願いします」といって原稿をダーッと送ってきます。すると、誰が何のために何を書いてきたのか全然わからないメール文があったりするわけです。相手はスマホで送ってくるのですが、スマホ同士だったら「ああ、〇〇さん」とわかるのですが、スマホのメールをアドレス管理されていないPCで見ると、件名もない、メールアドレスを見てもよくわからない生徒から何かタメロでバーッと書いてあるものが送られて来て、多分あの生徒がやったんだろうなと思った時点で私は無視するわけですね。あるいは、返信するわけです。「君はどこそこのどこそこに所属している誰ですか。そういうことからきちんと書かないと相手に伝わらないので、このメールは破棄します」といってジャンクのほうに入れてしまうわけです。そうすると、本人は焦って「すみませんでした。立教池袋高校何年何組何部の〇〇で、このたびこういう原稿で」と送ってきます。書けるじゃないと思うわけですが、最初はそういうことをやる生徒がほとんどです。つまり、相手は何で見るかによって同じ文章であっても情報の見え方が変わってくるということを、怒るだけでなく教員としてきちんと伝えないといけないので、そういう技量というか度量というものがもう明らかに必要な時代になっているのだろーなと思っていますが、そういうのが面倒くさかったら何と言うかということ、禁止というわけです。それでは絶対に成長しません。

### 【基本に立ち返ることの大切さ ―未来を担う生徒たちへの学校としての責任―】

ということで、日本の学校教育の現場に関して言うと、本来ならばそういったものも啓蒙していかなくはない反面、何を言い始めたかということ、1人1台タブレットを持たせますというようなことをやっているわけです。タブレットの中にはメール機能もありますがメールはしないで、じゃあ何を教えるかということ、これですね。指先でのタップです。だから、キーボードが打てない生徒がどんどん出てきます。PISA の結果を見ても、日本の家庭でのパソコンの所有率は、多分下から数えたほうが早いぐらいの順位になっています。スマホはものすごく持っているのにという弊害もあって、アクティブラーニングとかいろいろ言われてはいますが、それに伴ってきちんとした日本語を表現するということも並行してやっていかないと、子どもたちのなかでは、日本語を使ってはいけるけれども日本語ではない文化になりつつあるのではないかということ、2020 年に向けて、学校の現場は意識して生徒たちと接していかないといけない時代に明らかに直面しているというこ

とです。

ちょっと話が変わってしまいましたが、こういうトラブルに巻き込まれたくないのだったら、1つは、本当に日本語を大切にすることです。言葉の重みをわかっていれば相手にきちんと伝わるということを私は今までの経験の中から感じていますので、生徒たちにそのことを話しているところです。

長くなりましたが、これで私の話を終わらせていただきます。今お話したことが、少しでも皆さん方のお役に立てばうれしいです。どうもありがとうございました。

## 質疑

○内田 どうもありがとうございました。やはり経験値から来ているものと、研究から出てくるものとの違いというのを、今日私はものすごく実感してしまっていて、そうか、そういう人たちの中の数%の人が、これだけの実績というか結果を残しているのかという数字を知っただけでも、ああそういうことなのかと。何か感想で申し訳ないのですが、でもよく考えてみれば、ほかのいろいろなことでも本当にごく一握りが全体を動かしているように見えることがあります。ネットの社会でもリアルの世界でも実は同じなのかなというふうに、非常に興味深くお話を聞かせていただきました。どうもありがとうございました。

どうですか、何か皆さん方から。そのほうがいいと思いますので。

○質問者1 すみません、お二方に1つずつ質問があるので、そういう形でよろしいでしょうか。本学の兼任講師で、別のところの中学校、高等学校でも非常勤講師をやっております。

まず、木村先生への質問なのですが、最後のほうに道徳基盤とネット利用の関係ということでお話がありましたが、その道徳基盤で示されたポイント、公正とか自由とかいった指標を挙げられているのですが、例えば、ケアとか公正とかいったものが、保守で分類されているクラスターでもかなり高い数値が出てくるケースが見られるとは思いますが、それがなぜ過激なネットの書き込みにつながる



っていくのか。そのつながりがいまいよくわからなかったというところがあります。例えば、アメリカの政治的態度というのを見るために、この道徳基盤という指標が挙げられているという話があります。アメリカのこうした道徳基盤とネット利用の相関関係というか、そういうものと比較して日本の特殊性があるのか、あるいはこれはかなり普遍的なものなのか。ちょっとそのあたりのことを知りたいと思いました。

内田先生への質問ですが、スクールガーディアンについて、利用しているのが9割以上女子校だというお話がありましたが、10代女子のネット利用だとか、それに関する経験といったものに関して、ジェンダー差がどのような形で関係しているのかということについてお伺いしたいと思います。よろしく願いいたします。



○木村 どうもありがとうございます。関心をもっていただき、大変ありがたいです。ただ、道徳基盤に基づいた研究、しかもこのネットの利用に関しては、去年ウェブ調査を実施して、今、分析を進めている途中というところなので、ご質問には、今日は直接お答えすることは難しいです。今ご指摘になった点、保守のちょっと弱い人たちとそれから無責任な人たちですね、日本型のリバタリアンという人たちとネットへの過激な書き込みとの関係は今、分析途上なので、何とか今年中には研究をまとめて出したいと思っています。少しお待ちいただければと思います。

あと、ハイトたちとの研究者間のコミュニケーションは、今後さらに発展しなければいけないという段階で、道徳基盤理論そのものは10カ国以上に翻訳されているような研究者が今取り組んでいるところなのですが、逆に私が今やっている研究というのは、ある意味ではこういう観点から見たちょっと変わったというか初めての研究のような形になっているので、その点でも今後ぜひ積極的に進めていって、皆様方にもご理解というか発信して関心を持っていただけるようにしたいと思います。すみません、ちょっと直接のお答えにはなりません。

○内田 ありがとうございます。ジェンダー差の話が欠落しておりました。申し訳ないです。女の子が多い理由は、性犯罪に巻き込まれる可能性が高いからです。基本的に、援助交際とかリベンジポルノとか、もう明らかにそっちになってしまう。スカウトの話とかいうところに巻き込まれる可能性が非常に高いです。ストーカーも、実は男の子にもあるのですが、やはり女の子に対してのストーカーの事例の相談件数が多くなってきているということもあって、スクールガーディアンさんに、男子校向きのお話をしてくださいと言ってもどうしても話の7割近くが女の子の話になってしまうぐらい、事例は女の子のほうが多いというところが1つジェンダー差なのかなと思います。性犯罪に巻き込まれることの危険性というところが男女の差の中では一番あるのではないかと思います。

だから、いじめの問題とかはある意味仲間内ですけれども、そうではない社会との接点をとったときに、性犯罪グループのようなものから生徒を保護する、監視するというようなことです。生徒の立場からすれば監視されるのは嫌だとは思いますが、少しでも生徒の危険を守りたいということから、学校がそういう対策を取り始めたというふうにお考えになっていただけたらよろしいのではないかと思います。お答えになったでしょうか。

○質問者1 ありがとうございます。

○質問者2 貴重なお話をありがとうございます。私の経験での質問なのですが、私が中学生ぐらいのときにはまだメールしかなかったと思うのですが、私の女の子の友人がクラスの男子から「裸の写真送って」みたいなことを言われて、それで送ってしまったがためにクラス全員の男子の間で広まって、それが先生にばれて問題になるというようなことがありました。何が言いたいかというと、メールのような、そこまでSNSとかに発展しない段階でも、やっぱりそういうことが起きてしてしまうじゃないですか。それを拡大解釈していったというか広がっていったのが今のSNSだと思うのですが、そういう問題を根本的に解決するためにはどうしたらいいのか、みたいなのはあるのでしょうかというのが気になりました。よろしくお願いします。

○木村 最後のところをもう1回言っていたいてよろしいですか。

○質問者2 ごめんなさい。SNS がなかったとしても、そういう小さいコミュニティとかにおいて、そういうどうしてもやってはいけないことをやってしまうのが中学生とか高校生の時期だと思うので、そういうのを根本的に解決する方法は一体どこにあるのかという、身もふたもない話ですみません。

○木村 私はどうしても社会科学的な研究に携わっているので、要は、発生件数とか割合でつついて考えてしまうところなのですが、実は SNS だからという考え方は、ある意味で非常にミスリーディングなところがあると思います。つまり、これから特に技術がいろいろ発展していく上で私たちが常に考えなくてはいけないと思うのは、考え方に技術決定論と社会決定論という大きな2つの枠があるということです。技術決定論というのはメディア論みたいなもので、メディアがあるから、テレビがあるから思考力が低下する。SNS があるからトラブルに巻き込まれる。つまり、技術が私たちを決定してしまうという考え方。それに対して、そうではなくて、それは使う側の問題だという捉え方。どんな技術も中立的であって、それをどううまく使うか、下手に使うかは人間次第だというのが社会決定論で、私自身は両方の要素があるというか、常に技術も人もある意味では差別なく、区別なく、人も人でなしも含めて1つのそういうネットワークをつくっているという考え方に立っています。

そうすると、今おっしゃった意味合いで言えば、常に私たちの中にはそういうちょっとおかしいことをしてしまう、先程の話で言えば SNS で炎上に加担する人で、学校でついつい Twitter で何かしてしまうとか、さっきの子であればちょっと間違った情報を意図的にやってしまう、いたずらをしてしまうというのは恐らく1%ぐらいの単位ではどうしてもあるということです。社会現象というのは基本的にはその1000分の1ぐらいになってくると社会的認知が出てくるというのは私自身感じているところで、例えば、いわゆる「おたく」といわれるような人たちが社会的に認知されるのも数万人〜十万という単位になってきたとき、日本の人口から見ると1%、1000分の1のオーダーまで上がってきたときに何となくそれが文化的現象というふうに見られる。それ以下だと、そこまで文化的現象とすら見られないというところがあって、この手のトラブルに巻き込まれたり、ちょっと無軌道とか外れ値的な行動をするのはおそらく1%前後のオーダーはあるので、どうしても社会的には大きな問題になるけれども、でも、逆に99%はそうではないわけです。例えば、児童ポルノとかで被害に遭ってしまう子に関しても、恐らくネットがなくてもリスクが高い層の子が巻き込まれるから、それを社会としてゼロにはできないけれども少なくしていくかというのはむしろ社会全体の問題で、個々の人間がどう振る舞うかということとはちょっと違うレベルなのではないかと私は思っています。

○内田 中高の教員の立場から言えば、いじめをしてしまうということについてですが、いじめっていじめをする人たちといじめられている人ともう1つ傍観者がいて、その傍観者が少しでも行動すると随分変わるのですが、何となく今度は自分かもしれないから本心をなかなか話してくれないというスタンスは全く変わらないですね。そういうことをやる割合も変わらない。学校のいじめの構造だとか生徒指導の難しさというものもずっとありますが、ただ、ツールが変わったので、その被害が非常に大きくなってしまったというこ



とがあります。その被害の大きさ、やってしまったら一瞬で全員に知られてしまったというスピードの速さ、先ほどもお話をしましたがその拡散のスピードの速さが全く違うということを経験者に実感させていかなくてはいけないということぐらいしか、対応は今のところ見えていないです。ですので、こういう事例だとか、あるいは自分がそういうことになった、拡散される立場になってしまったというようなことをロールプレイとかワークショップといったようなところで経験値を積み重ねて、何とかしていくしかないんだろうなというふうにも思っているのが現状です。

ただ、そういう経験値があったからそういう人たちがしないのかというと、そこがまた別物でもあったりするので、とにかくちょっとしたことがヘッジがかかってもものすごく大きなリスクになるということを少しずつ広めていく、子どもたちにわからせていくぐらいしか、今のところ手段は見いだせていないということです。よろしいですか。

**○質問者 2** はい。ありがとうございます。

**○質問者 3** せっかく来たものですから、いろいろ聞いていったほうが得するなと思って、ちょっと最後にお聞きします。お二人のお話はとても興味深く伺ったのですが、木村先生のほうのお話というのは、私が分析したらちょっとまずいかもかもしれませんが、SNS が持っている社会的な影響力から入られたんですが、最後は政治社会学的なアプローチみたいな話があって、実は私は両方とも面白かったんですね。

お話の中で、政治的社会的価値観のグループを3つに分けてという、最後のほうについて質問が2つあります。1つは、リバタリアンという概念は日本にあまりなじみがないものなので、これは日本社会に適用できるようにした上でのカテゴライズなのかというのが1つ。

それともう1つは、最後の表ですね。ページ数で27、28。これは実を言うと白黒なので、どの指標が多いのか少ないのかはこれを見た限りでは残念ながらわからないんですよね。先ほど定義していただいたときに全部頭の中に入ればいいのですが、今後出版されるものがあれば、その具体的な情報でいいのですけれども教えていただけたらと思います。

**○木村** ありがとうございます。まず、その政治的指向性の問題で、これは、リバタリアンはアメリカ調査だとはっきり出ていて、経済自由と生活スタイルの自由の両方とも自由が高いのですが、それ以外の情動に関しては、リベラル派や保守派に比べればやはり低いという人たちで、基本的には自由至上主義というふうに訳されるのがリバタリアンといっているものです。アメリカ的文脈だととにかく抑圧に対して、特に連邦政府ですね、社会集合的な価値観に対してものすごく反発をする個人主義的な方々。日本で私が調査した限りでは、残念ながらそういう方はいらっしゃらなくて、情動レベルが全体中央値よりも低いグループというのが2つ出てきました。それもある意味ではウェブ調査なので、ポイントが欲しくてただ回答するだけという方も結構いらっしゃるわけです。それはサティスファイスというような概念でいうのですが、もちろんモニター会社もいろいろ考えているので、回答時間だとか回答パターンとかであまりにもいい加減だと思うものはじくようにしているのですが、単純にモニターとしてそうしたシステムをかいぐってそれなりにいい加減にやる方というのがいらっしゃいます。でも、それはある意味では日本型のリバタ

リアン。つまり、自分にとって都合がいいことだけあればいいということで、私としてはそのパターン、情動レベルが中央値よりも低い2つのグループをリバタリアンと呼んでいるので、これは定義としてはおそらく社会文化ごとに違うのだろうと思います。日本の場合にはアメリカ型のリバタリアンは今のところいないというふうに考えております。

最後の図は、お配りした資料では白黒になってしまっているのですが、上からそれぞれ保守A、保守B、保守C、保守D、保守の情動が高い人から低い人へ。リベラルで高いグループ、低いグループ。リバタリアンで高いグループ、低いグループで、8つに表は分かれていますので、とりあえずそれでご確認いただけるとありがたいのですが、場合によってはこここのところだけでも私のホームページに色つきで載せられたら載せたいと思います。申し訳ありません。そういったところで、お答えにさせていただければと思います。

**(注：P17の下段の図 27.28 参照)**

といったことで、もともとは2人とももう少し短くお話して、内田先生と私で少しディスカッションしている中でフロアの方にもご参加いただくという予定だったのですが、時間の関係で急きょ質疑応答のかたちを取らせていただきました。でも、フロアの方から積極的にいろいろなご意見を伺えて、大変ありがたく存じました。

以上